
カノンの不幸な日々

梅宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノンの不幸な日々

【Nコード】

N8485H

【作者名】

梅宮

【あらすじ】

主人公のカノンを、これから学園で出会う人達が、不幸にしている学園コメディです。（なおこの作品は、以前書いていたカノンの非日常の修正した物です）

プロローグ：前編

「はあ……」

辺りには見渡すかぎりの草原が広がっており、地平線の彼方まで続く電車の線路を沿って延々と歩きながら、俺はトランクを片手に嘆息していた。

俺は、カノン・ストレイト。なぜ線路に沿って歩いているのかという、これには理由があるので説明させてもらいたい。

……っていつか誰に説明するんだ？まあ気にしないでおう。

それは、昨日の3月23日のことだ。

その日、俺は受験した近くの高校の入学が決まり、バイト先の花屋の店長に高校に合格したことで、バイトをこれからも続けるという意を伝えてから家へと帰り、何気無く覗いた郵便受けに封筒が入っていることに気が付いた。

誰からだろうと封筒を手に取り裏を見るも、差出人の名前は書かれてなく、宛名だけが俺宛だと示しているだけだった。

不気味に感じながらもとりあえず中身を見てみようと思い、封筒を持って家に入ると、自分の部屋で封を開けて中身を取り出す。

封筒の中には、一枚の紙が入っていた。それには、

【御入学おめでとうございます。貴殿は、聖マティア学園高等部、5科あるうちの一つ『能力科』に進学されました。入学式は4月1日。会場場所はリブエスという街にある本校の体育館でありますので御出席ください】

と、なぜだか分からないが受験した覚えのない聖マティア学園高等部の能力科の入学案内通知だった。

これは何かの手違いだろうと、通知の右下に記載されていた学園の電話番号に自宅の電話で問い合わせてみると、

「いや手違いではないよ。とある人が、君を推薦したんだ。あ、ちなみに僕が校長ね」

なんと校長に返答された。相手が相手なので恐縮しながらも、俺は丁寧に断ろうと口を開いた。

「すみませんが…自分は、近くの学校に行くつ…」

「来なかったら、君が一番秘密にしていること世間にはらすからね？」

最後まで言い終わる前に校長に脅された。

この時、とてつもなく嫌な予感がしたが、まさか5年前のあの秘密のことではないよなあ、と希望的観測をいだいていたが、

「君の秘密は、5年前、家の近くの森で、お——」

「ス、ストップ！！ さっきの言葉は撤回します喜んで学園に行きますというか行かせていただきます！！」

見事に嫌な予感的中してしまった。慌てて今度は俺が校長が言い終わる前に制止をかける。

「始めからそう言えばいいんだよ。あつ、そうそう、そこからじゃあ流石に通学は無理だと思うから学園寮に入ってもらうからね。寮の入寮期間は、明日から入学式が始まる前日までだから」

校長はそんなことを言ったが、俺の耳にはほとんど届いてなかった。なぜなら冷や汗ダラダラで、

（な、なんで見ず知らずの校長があ秘密を知ってるんだよ！？あの秘密は、俺とあの時いたあいつの二人だけしか知らないのに……まさかこの人、5年も前から俺があいつのどちらかをストーカーしてたんじゃないだろうな！？）

と、考えていたからだ。

すると、

「君、失礼だな。私はストーカーではない！」

ブツッ。ツー、ツー。

まるで心の中を読んだかのように唐突に校長は叫んでから電話を切られてしまった。

……まあ、こうして秘密をばらされるのを避けたるために学園に入
学することになったわけだ。

聞いていた範囲では寮には入学式の前日までに入ればいいらしいが、
早めに行こうと思い、家にあった電車の運行時刻表を調べてみると、
今日の最終電車にリブエス行きの電車があることが分かった。

それから慌てて向こうに持っていく荷物を二時間くらい掛けてトラ
ンクに全て詰めて、トランクを持ってそのままバイト先に向かい事
情を説明してバイトを辞めることを店長に伝えると、

「そうか。リブエスにある学園に行くためにバイトを辞めるのか……
。さて、刺殺と後の出血死どっちの死に方がいい？ 選ばせてあ
げるよ」

そう言つて店長は、殺し屋を連想するような自然な動作で懷からナ
イフを取り出した。

「いや…選べも何もどっち選んでも刺されることにかわりないから
つて言うか、何で俺が殺されないといけないんですか!？」

「バイトを辞める落とし前に決まってるじゃあないか」

なにを当たり前のことを聞くんだという表情でこちらを見てきた。

「いやいや、バイト辞めるだけで落とし前っておかしいですから」

俺は抗議したが、

「もう御託はいいから、刺される！」

店長はそう叫んで、ナイフを振り回しながら走ってきた。

「嫌だーっ！！」

俺も叫びながら店長から逃げるために店の外へ飛び出した。

23分後…

終焉はあっけなく訪れた。

「くっ…、この離しやがれ！」

「はいはい。署で取調べが終わったら離してやるからおとなしくしてろ」

店長は警官に連行されていった。

やっぱりナイフを振り回しながら人を追い掛けていたから通報されたようです。

そこで俺はハッとして腕時計を見ると、もう最終電車の発車時刻ギリギリの時間になっていた。

俺は慌ててトランクを花屋に取りに帰り駅に向かった。

そうしてどうにか最終電車には乗ることができたのだが、疲れが蓄まっていたせいか、電車が発車してから急激な眠気に襲われたので、まるで意識を失うように眠ってしまった。

そして目が覚めたら、俺は大破した電車の中で横になっていた。

「……えーと、なにがあっただ？」

ってゆーかなんで俺は生きてるんだ？

寝惚け眼を擦り、これは夢なんじゃないかと頬をつねってみたが、残念ながらこの痛みは現実だということを思い知らされる。

とりあえず、誰かいないかと電車の中を調べることにする。

……20分後。

「なぜ誰もいない…。寝る前まではあんなに乗客いたのに。……乗客は、どこにいったんだ？」

もしも事故なら死体……。それでなくとも肉片ぐらいは見当たるはずだが、まるで最初から誰もいなかったかのように、塵一つありはしない。

このとき、俺の脳裏にある言葉が浮かんだ。

『神隠し』

まさか考えすぎだろうと思ひ、その考えはすぐに思考から消去した。

(続く)

プロローグ：中編

いつまでもここにいても仕方がないので歩いて学園に向かうことにした。

「不幸中の幸いか、トランクが無事で良かった。これがなかったら色々と困るからな。現在地がどこかわからないが、まあ線路を辿って行けばそのうち最寄りの駅に着くだろう」

この時はそんな独り言を言って歩きだしたのだが、その楽観的な考えは間違いだと、歩き出して数時間後に嫌というほど疲労と共に思い知らされた。

歩き出した頃はまだ朝日も出ていなかったが、今ではさっきまで空を照らしていた太陽も、夕日として沈みかけている……。

これでとりあえず説明終了なんだが………ホントなんで俺、誰もいないのに説明なんかしたんだろう……精神的につかれてるのかな……。

まあ精神的に疲れてきてもしかうがないか…、まさか半日以上も歩くことになったうえに駅が一つも見付からないなんて想定外もいいところだ。

「もう泣きたくなってきたよ」

そんな泣き言を口にしても、周りは地平線の彼方まで続く見飽きた線路しか見えないだから、余計に鬱になってきたただけだ。

「なんかもう死にたくなってきたなあ」

こんな気分ではもう歩く気もおきないので、仕方がないので今日はもう歩くのは止めて、ここで野宿をすることにした。

「さて、もう寝るか……ん？　なんだあれ？」

線路から少し離れた平地に寝転がろうとしたそのとき、遙か遠くに何か複数光る物が見えた。

「あれは、……何だろう？　見に行ってみるか」

気になったので、トランクを持って光る物のところに行ってみることにした。

光る物のところに行ってみると、そこにはなんと街があつた。光る物の正体は、街の建物の照明などの光だったのだ。俺は街の入り口に街の名が書かれた看板がないか辺りを見回したが、名前が書かれてる看板は見付からなかったので、俺は誰かにここがどこなのか聞こうと思い街の中へと入っていた。

街の中に入ってみると、なぜか誰も歩いてる人はいなく、店などもまだ店仕舞いをするには早い時間なのにもう店が閉まっていた。なんでだろうと不思議に思いながらもなんとなく街の中心方向に歩いていると、

「……………」

前方約10メートル先の光景に俺は声を失った。そこには全長10メートル筋肉マッチョの黄金の像などという悪趣味きまわりない物がライトアップされてあった。そして…

「うひやははははははははははは！」

その像の近くを変な黒いスーツ男が、奇声をあげながらドタドタと走り回っている。

「……………、すみません。一つ聞きたいんですけど、この街の街名ってなんですか？」

話し掛けるのは凄く嫌だったが、一言二言だけ話すだけだから我慢することにした。

「私は、ここで奇声をあげながら走り回って聖マティア学園で雇われている者だとアピールして学園の寮に入る新入生に寮の場所を説明するために待ってますグヒヒ」

…………… どうしよう。なんか会話が成立する気がしない。

こいつの話を聴いてわかったことは、こいつが変人だということと話し方がずームカつくということが十分にわかった。こんな奴雇ってる学園は本当に大丈夫なのか心配になってきた。

「…………… って、まてよ。なんか今、気になる言葉があったような」

さっきのこいつの話のもっとも重要である言葉を頭の中で並べていく。そしてようやく「聖マティア学園の寮に入る新入生を寮に案内するために待ってるんだよ」という言葉を探しあてた。

「あのう俺、今年から入学する新入生なんですけど、寮の場所がわからないので教えてください」

こいつに尋ねたくなかったが、……いやむしろ屈辱を感じたが、やむを得ないので場所を聞いてみた。

「寮なら街の北門の近くの森の中にあるからすぐにわかると思うグヒヒ」

「説明ありがとうございます」

心の中では全然ありがとうございますと思ってないが、礼儀として一応言っておいた。

「それにしてもなんで走り回ってるんですか？ 走る意味なくないですか？」

寮に向かう前に、このあまりに話したくないこいつに、率直な意見を述べた。

「そんなことはないぞ。私好みの人をお持ち帰りをするために走り回りながら目をつけているのだ」

この一言で、こいつはすぐく危ない変態だということを理解した。

「それと君に、一言言いたいことがある……結婚してくれ」

「……」

今…こいつなんて言った？ケツコンという単語が聞こえたような気がしたのは気のせいだろうか……。

「僕は、本気だよ……。両親は理解してくれてるから気にしないでいい。そういえば名前をいつてなかったね。僕の名前は、ダーティ・パラノイアだよ。それで結婚式場どこがいいかな？ 形式はどうする？ やっぱりよ……」

妄想の中にトリップでもしてまったのだろう。恍惚な表情で話し始めた。

「……こちらも一言言いたいがあるんだけど」

こいつが妄想の中の話を現実として進めていこうとしていることに恐怖を感じ、止めに入ることにした。

「なんだい？ なんでも言っていよいよ」

あいつはこちらに汚らしい笑顔を向けた。

「じゃあ遠慮なく言っよ」

大きく息を吸い込む。

「貴様なんかと結婚する気なんかないんだよ、この変質者が。10秒以内に目の前から消え失せろ。そして二度と、俺の前に姿を現すなこのクソ変態」

言ってやりたいこと言ってやった。

「ふっ……ふふっ……ふふふっ……ふふふ……うふふふ……ふふ……あーっはっはっは！！はは！あははは！」

いきなり笑い出した。

それを見て俺は、こいつ完全に壊れたなと思っていて、

「その詰り方最高だよ！！もっと詰ってくれ！！」

何か生き生きとして、さっきよりも恍惚な表情で俺のほうに走ってきた。

今まで以上に奴に対して、恐怖を感じた。

とりあえずこの場を切り抜けるために方法を思索してみてることにした。

- 1・この場を凌ぐ為に奴の言うことに従う
- 2・この場から全力で逃走する
- 3・この場で奴の息の根を止める
- 4・誰かに助けを求める
- 5・奴を倒す

普通に考えて浮かぶのは、この5つの選択肢ぐらいなもんだろっか。まず1はこの選択肢の中で一番の論外だな。これを選んだら同時にプライドを捨てることになる。そして多分二度と表を歩けない気がする…。

2は確かにこの場を凌ぐことはできるかもしれないが、奴は学園の関係者。入学後に必ず付き纏ってくるからこの場を凌いでも意味がない。

3はある意味これが一番の解決策だと思うが、これをしたら捕まっ
て自分の人生をフィにしてしまう。……こんな奴にも法律が適用し
てしまうとは、世の中間違っているとは思えない……。

4は他人を自分の不幸に巻き込みたくないんで却下。

5は…てゆうか先に他の選択肢潰したから、もうこれしか選びよう
がないからこれにするしかない。

と、5に決定したのと同時に、奴が飛び掛かってきた。

「飛びつくからしっかりキャッチしておくれよ！」

「誰が貴様なんかキャッチするか！」

言うと同時に左にバックステップをして回避した。

「ちよつとなに躲し…」

ぐしゃ

喋ってる途中でなんか生々しい音が聞こえた気がするのだが、どうせ定番の顔面地面打ちしたのだろうと思い、奴のほうに目を向けた。

「やっぱりな」

そこには、やっぱり奴が地面に倒れていた。

「大丈夫か？」

こんな奴でもさすがに少し罪悪感が生まれたので、尋ねてみた。

最初は身体が痙攣し続けていたが、次第に痙攣は治まりゆっくりと起き上がりだした。そして…

「よくも躲しやがったな！ 殺してやる！！」

豹変しやがった。

(つづく)

プロローグ：後編

奴は起き上がるなり、黒っぽいグローブ？のようなものを装着しました。…なんか小声で

「ゲヘヘ、死体にして持ち帰ってやる」

と、聞こえるのは気のせいだろうか…

「すまないと思ってる。許してくれ」

回避したことについては、不本意だが謝っておいた。

それにたいして奴は、笑顔で、

「わかった許すよ…そしてこれは、僕の気持ちだ！」

言い終わると同時に顔面にむかって右ストレートが飛んできた。

「っ…！」

不意に飛んできた右ストレートを反射的に顔を逸らして躲し、本能的にあいつから距離をとった。

「って全然許してねえじゃん！」

「惜しいな…このグローブには、即死効果がついてるんだ。さっき

のに当たってくれたなら一瞬で死ねたかもしれないのに……まあいいや、さあ僕を裏切った罰を受けてもらおうか！そして君を僕だけの物にする！」

なにやら説明口調だが、とりあえず奴のグローブの攻撃を食らったら死ぬかもしれないことと、もう戦いが避けられないことがよくわかった。

結局こいつを倒す以外道はないようだ。だが問題は……

「どうやってあいつを倒すかだ……」

とりあえず、自分が考えた勝利条件と敗北条件は、

勝利条件 あのダーティとかいうのを戦闘不能にする

敗北条件 あのダーティとかいうのに殺される。または、息の根を止める。

なのだが、

……なんだろうこの勝敗条件……自分が考えといてなんだけど、なにか作威的なものを感じるような気がする。

まあそれよりも問題なのは、戦闘方法だ。……奴のさっきの攻撃の動きを見るかぎり、多分あいつは格闘技をやっているようだ。そのため接近戦闘は不利になる。理由は、奴に触れられる危険性が高いからだ。この場合、遠距離から攻撃するのがセオリーなのだが、あいにく遠距離攻撃の手段を持ち合わせていない。残された戦闘手段は、リスキーな上にあまり気が進まないがあれしか残ってない。

そうと決まったら俺は、

「神の気まぐれ《ゴッドカプリス》」

先手必勝とばかりに奴を倒すために、自分の能力名を宣言した。

「な！？君は能力者か！」

まさか俺が能力者だとは考えていなかったようだ。一瞬呆然となっていたが、

「だが、なにも発動していないところを見ると発動するのに時間が掛かるタイプの能力のようだね」

こいつに指摘されるのは屈辱的なのだが、そのとおりなのだ。俺の能力が発動している形跡がないのだ。だがおかしい…、能力は普通、完全発動後に疲労感に襲われるのだが、今物凄い疲労感に襲われているのはなぜなんだ？まああの能力だからしょうがないんだがなあと、そんなことを脳裏で思索していると、

奴がこちらに走ってきた。どうやら発動していない今が勝機とみたようだ。

「さあ…終わらせてもらっぞー！」

「！？」

攻撃を回避しようとして回避行動に移ろうとしたら、足がもつれて地面に倒れた。どうやら疲労感が溜まりすぎたようだ。もう立つ気力すら残っていないようだ…。当然奴が、そのチャンス見逃すわけはなく、

「その命もらいうけるよ！」

さらにスピードをあげて走ってきた。そして俺との距離が2メートルぐらいに縮まった瞬間…消えた。

「…あれ？」

いきなりの展開に何がおきたのかわからない。まずは、情報を整理してみよう。奴はさっきまでこちらに走ってきていた。そして俺に近づいた瞬間消えた。そして俺は、能力を発動させていたがなにを発動してたかわからなかったと、ここまではOKだ。ここまで考えてみていくつかの可能性が脳裏浮かんだがそこまでだった。なぜなら…、

「その君、ちょっと署まで来てもらおうよ」

警察官に連行されそうになっているからだ。

「ちょっと待ってくださいよ。俺が何をしたってゆうんですか？」

警察に連行されるような罪を侵した記憶はないので聞いてみた。

「貴様とあともう一人が喧嘩を行っていると通報があつてな、この街では、喧嘩は御法度でやった者は留置所に数日入らないといけないんだ」

警察官のおじさんはそう答えた。

そして、留置所で数日間すごすことになり釈放されたのは、入学式

の前日だった。

第1話：前編

「…………あの悪夢から解放された…」

今朝、目覚ましを止めての第一声がこれだった。

昨日ようやく留置所から釈放されたのだが、留置所に入ってる間、毎日悪夢を見た。内容はこれだ。

何処だか判らない街中で奇声をあげながらあのダーティとかいう奴が、

「ゲヘヘ、待ってくれよ」

と、言って追い掛けてくる夢だ。

もう悪夢の域だな。

当然、あいつを待って触るのは拒否したいので、

「誰が待つか！」

そつ怒鳴ってあいつから逃げるためにスピードをあげるのだが…

逃げる俺を見てあいつは、

「逃げてても無駄なのにグヒヒ…」

と、言った数秒後に毎回なぜか路地裏に追い込まれる。

追い込まれた俺に、奴が喜び勇んで飛び掛かってきた瞬間に目が覚める。

初めてこの悪夢を見た時は、あいつとの戦いが印象に残りすぎたために見たのだと思っていたが、寝るたびに同じ悪夢を見るのはおかしいと思い、俺は、病院でカウンセリングを受けてみようと思いついた。

「カウンセリングするのめんどいから帰って」

女性カウンセラーは、どうでもいいとゆう表情で言いやがった。

「早く帰ってよ。私に余計な仕事をやらせるつもり？」

「ちょ、待ってください！なんでいきなりそんな不機嫌なんですか！？」

さつきから言われてることにたいしてムカついたが、気になったので聞いてみると、

「二日前に仕事でミスしたのよ！たかが患者が生と死の境をさ迷ったくらいですよ？それで減給くらったからもう働く気なんてでないわよ！」

当たり前のように言われた。

「あんた最低だな……」

「なに言ってるの。最高のカウンセラーじゃないの。さあ、わかったら今すぐ帰れ！」

そうして診察室から追い出された。

……でも。ある意味、助かったかもしれないなあ…。

病院を出て、内心でそう想う。あのカウンセラーは人の命をなんとも思っていない。あいつに相談したらなんか悪夢がさらに悪化しそうな気がする……それも高確立で。

「…寮にいつてみるか」

いつまで病院の前にもしょうがないので寮に行ってみることにした。

病院から寮へと向かう道には、いたるところに行方不明者の写真が貼ってあった。それをちらりと見てすぐに目を反らす。……よく見なくてもわかった。それは間違いなく俺の悪夢にでてくる奴が写った写真だった。

「……………」

見たことを脳裏から削除した。

道なりに進んでいると、前方に北門と書かれた門があり確かに近くに森があった。

ここだなあと思い俺は、森に足を踏み入れようとした瞬間、

「危ない!!」

背後から声がした。

「えっ!？」

振り返ってみるとそこには…

「……サヨウナラ…オレ」

と、言いたくなる状況だった。

なぜかって? そりゃ全長8メートルぐらいの黒い犬らしき生物が口を開けて俺を食べようとしているところだからだ。いきなりそんな状況になったら誰だって死を覚悟してしまうだろう。

「ポチ、待て!!」

犬らしき生物の牙が自分に刺さろうとする瞬間、誰かの声が割って入る。

ばう!

その黒犬は呼ばれた方に向かって待てのポーズをした。

「…た、助かったのか?」

ってか…ポチ?

俺は助かったことに嘆息しながら声がしたほうへ視線を向けた。

そこには、一人の長髪の女の子がいた。

俺がその女の子を見ての第一印象は、美人だった。

癖無く真っ直ぐに垂らしている髪は、金髪。服装は白のキャミソールにチェックのスカート、そして綺麗に整った顔からは、活発な印象を受けた。

「あのう…私、ミリア・ウィルヘルツてゆんですが。お怪我はないですか？」

「あつ…俺はカノン・ストレイトです。怪我はないです」

その問いにそう答えた。

「それにしても大きいな。ポチ…」

俺は、ミリアとゆう女の子の背後にいる黒犬を見た。

「まあ大きいですね。この子は、人型からなぜか犬型に突然変異した夢魔で、一カ月前のサイズが八十センチだったのが急成長して七メートルも大きくなったの」

苦笑気味に言ってきた。

あらゆる意味で突然変異ですね

と言ってやりたかったがやめといた。

「それでなんでポチが俺を襲ってきたんですか？」

今一番、気になることを聞いてみた。なぜなら…

「……………」

さつきからミリアの後ろからポチが殺気が込められた視線を送ってくるからだ。

「多分なんで…」

「小僧から美味そうな悪夢の香りを感じたから喰おうした。お前ごと喰えば少しは腹の足しになると思ったから喰おうとした」

ミリアが質問に答えようとしたとき、彼女の背後から声が割って入ってきた。

「えっ…いまの声って、まさかポチ……お前なのか!？」

「そうだが？」

俺の質問に当然だというふうにはポチが答えた。さらに何か言おうとしたが…

「あのう…カノン君、話が脱線してるんですけど…」

ミリアが、控えめな声で指摘した。

「あっ、ごめん」

話に復帰した。

「俺から悪夢の香りがしたからポチが喰おうとしたのはわかったんだけど、喰われたらどうなるんだ？」

ポチに疑問に感じたことを聞いてみた。

「悪夢だけを喰えば二度と、喰った悪夢を見なくなるだけだ。」

ポチは簡潔に答えた。

それを聞いて俺は、

「…ポチ頼みがある。俺の悪夢を喰ってくれ」

深々と頭を下げてポチに頼みこんだ。

「…主人が待てと命令をしているから喰えん」

ポチが非常に残念そうな表情で言った。

「待てを撤回します」

ミリアはポチにそう言ってくれた。

言い終わった瞬間に、俺の目の前を黒い物体がぶつかって押し倒され、俺の顔を…

「いひゃあっはうっやめてっ！！」

顔を盛大に舐められた。

ポチのヨダレは、強烈に臭かった。この世の物とはおもえないこの臭いを例えるなら、血なまぐさい臭いと、汚物の臭いと、生ゴミの臭いを×1000したぐらいの臭いだった。…これって歩く公害ではないのだろうか…生物になぜこんな臭いがするんだ？

「あ…れ…？」

その匂いのせいだろうか……視…界がか…すんで…き…。

そこで意識を失った。

「ん……？」

目覚めた俺が、最初に感じたのは静けさだった。

「俺は？」

次いで感じたのは、俺がベッドで寝かされていることだった。状況がわからないので周囲を確認。辺りから察するに室内だとゆうことが判った。

外はどうなってるのか気になったのでベッドから起き上がり、近くにある窓に歩いて行こうとすると、

「あれ？カノン君、もう大丈夫なの？」

部屋のドアが開きミリアが入ってきた。なぜか手に注射器をもって…

「大丈夫ってなにが？ところでここどこ？……それと手に持っている注射器はなに？」

とりあえず、現在どうなっているのか聞いてみた。

「今居る場所は、学園の女子寮の私達の部屋よ。カノン君、ポチに悪夢を喰われてる途中で失神して倒れたの覚えてないの？すぐに寮まで運んで、私が看病してたのよ」

寮に居る理由は、説明してくれたけど…

「…で、その注射器はなに？なんに使うの？」

「これ？洗……まあなんでもいいじゃあないの」

「全然よくないよ！洗の続きはなんだよ！！」

「まだカノン君に使用してないからいいじゃない」

「『まだ』！？使うつもりかよ！」

チツ。と、ミリアから舌打ちが聞こえたのは気のせいだろうか……
そうだと願いたい。

なんかこの会話で今までミリアに抱いていた印象を改めて再認識する必要があるなあと想っていると、

「そういえばカノン君って異能科の新入生よね？」

この空気はヤバいと感じとったのだろう。急に話題を変えてきた。

「なんで俺が新入生って知ってるんですか？」

「調べたのよ」

「どうやって!？」

「男子寮の寮長に聞いたのよ。まだ来てない新入生がいるって」

どうやら普通の方法で調べてくれたようだ。

「そういえば、ミリアも新入生なのか？」

ミリアとの話で聞いてなかったので聞いてみる。

「いえ、私は二年生よ」

なぜか残念そうな表情で俺を見てきた。

「あのう…すいません。まさか先輩だとは知らず同い年だと思い呼び捨てにしました。先輩」

俺は、ミリアに謝っておいた。

「別にいいよ。今までどうりに、ミリアって呼んで、…これからは間違っても先輩とは呼ばないでね」

なんだろう…間違ってもミリアを先輩と呼んではいけない気がする…先輩と呼んだ瞬間にとんでもないことになりそうな予感を俺は感じた…

「わかりました…」

これ以外俺は、言うセリフを思いつかなかった。

ふと俺は、窓から外をしてみる。……もう夕方になっていた。

「もう夕方なんで、俺そろそろ男子寮に行きます」

俺は、椅子から立ち上がりトランクを持って部屋を出ようとした。するとミリアが…

「あれ？なんで男子寮に行くの？」

と、疑問系で首をかしげながら聞いてきた。

「いや。俺男なんで、男子寮に行くのは当たり前じゃないですか」

なに当たり前のことを聞くんですかとゆう表情で答えた。

「そう言う意味ではなくって、もう男子寮にカノン君の部屋は在りませんよ？さつきカノン君の部屋はもう必要ないって言うてきましたから…」

笑顔で言ってきた。なぜかドアの方に向かい何処からか取り出した鎖で、嚴重にドアを鎖で封鎖し始めた。

「ちよっ…勝手になにやってんだよ！住むとこなくてどうやって学校に通えばいいんだ！？それとなんで鎖でドアを封鎖する！！」

俺の言い分に彼女は、

「ドアを封鎖したのは、カノン君を逃がさないためよ。カノン君は、これから私と一緒に暮らすんだから」

また笑顔で答えてきた。

…なんか今、有り得ない言葉が聞こえてきたような…一緒に暮らすと、…そうだもう一回言ってもらおう…それで聞き間違いかどうかはつきりする…

「今………なんて言いました？」

俺は、なるべく平常心を乱さないように言った。

「『ドアを封鎖したのは、カノン君を逃がさないためよ。カノン君は、これから私と一緒に暮らすんだから』って言ったんですよ」

またまた笑顔で言ってきた。

「……ちよつと待て！なんで俺が君と暮らすことになってるんだ！？」

「私が決めたからです」

「なんで君が勝手に決めるんだよ！？」

「カノン君の意見は、必要ないからです」

なんだろう……この自己中心的な発言は。俺が倒れる前のミリアと倒れた後のミリアの言動が違いすぎじゃないか？俺は、もう何も言う気も聞く気もなくなってきたので聞き流すことにした。

5分後……

「カノン君、一緒にこの部屋で思い出つくろうね」

「……………」

俺が再び話に耳を傾けてみると、いつの間にかミリアの部屋で思い出をつくるどころまで話が進んでいた。聞き流し過ぎだ。

「まずは、最初の思い出にキスをしましょ」

「はい！？」

ミリアは頬を赤らめて俺の方に近づいてきたが、俺は逆に、あまりの急展開に顔が青ざめて後退りする。が、すぐに窓際まで追い込まれてしまった。

「くっ……………！」

非常にまずい展開だ。逃げ出したいところだがドアは封鎖されて逃げられない。どこか逃げられるところはないかと辺りを見回すと、意外にすぐ近くに逃走経路があることに気付く。

「覚悟はいいですね？」

ミリアが無邪気な笑顔で尋ねてきた。

それにたいして俺は、後ろを振り向き窓に向かって全力でトランクを投げつけた。

ガシャン！

ガラスが割れると同時に俺は窓に飛び込み…地面に落下していった。そして…、

どごおっ！！

「ぐはっ…」

地面に叩きつけられた。背中をおもいきりうちつけて痛くて立ち上がれない。これでは逃げた意味ないじゃないのか…。と考えていると、

「…ポチ捕まえなさい」

と、上から声が聞こえてきた。俺は、上を見た。そこには…、

「般若！？」

俺がそう叫んでしまうような表情のミリアが、二階から俺を見下ろしていた。

「うわあああ！！」

俺は、あまりの恐怖にその場から逃げ出した。

この後三時間、ミリアから逃げ続ける恐怖体験をした…。

（続く）

第1話：中編

その後、なんとかミリアを撒いて安堵して歩いていると、偶然にも男子寮を発見し、すぐさま寮長室に乗り込んで寮長に今までの経緯を説明してどうにか部屋を借りることができた。そうして急いで自分の部屋に向かうと、部屋のドアをすぐに開けて入り、すぐにドアの鍵を閉めた。そしてベッドに向かい、トランクから時計をだし、目覚ましをセットして…

「…スー、スー」

あまりの心身の疲れで俺は急激な眠気に襲われ、眠ってしまった。

そして、今朝の起床にいたるわけだ。

今は、あの悪夢から解放されて実に清々しい気分だ。

ぐ
……

突然、俺のお腹が空腹を訴えてきた。

「…腹減ったな」

昨日から何も食べていないのだから当然か。

俺は部屋の隅にある冷蔵庫をちらりと見ると、何も入ってないと想いながらも、ダメ元で開けてみた。

すると、

「あつ、カノン君おはよ……」

バン！！

壊れるんじゃないかというほどおもいつきり閉めた。

「ハアハアハアハア……！」

なにか、見てはいけないものを見たような気がする。……うん。気のせいだ。気のせいだからこの冷蔵庫を縄で縛って上からコンクリかぶせて固めてから海に沈めよう。

「二人きりだからといってそんな興奮しなくても……」

「うわぁ！？」

すぐ横から声が聞こえ、俺は思わず飛び上がった。

横を向いて見ると、頬を赤らめたミリアが立っていた。

「なんでお前がこの部屋に居る！？」

突然のミリアの出現に俺は、声を荒げてしまった。ってか、その前にいつの間に冷蔵庫から出たんだ……？

「普通にドアから入りましたよ」

ミリアは、そう言ってきたが…

「…ちょっと待て、…ドア、鍵掛かってなかった？」

「掛かってましたね」

「どうやって鍵を開けた!!」

「合鍵で開けました」

「合鍵!?なんでそんな物を持つてる!？」

「寮長室でカノン君の部屋のスペアの鍵の鍵型とって造ったんです」

ミリアは平然と言ったがこっちは平然としてられない。

「それってどう考えても犯罪行為だと思っただが…」

「あら、カノン君知らないの?この学園に居る間は、法は適用されないわよ」

「……………はあ!？」

俺は驚いた。まさか法が適用されないとは。わかるはずもない。

「一年前に校訓が、『法なんか無視しろ。欲望に忠実に生きろ』ってのになったの」

ミリアが簡潔に説明してくれた。

「…なにその校訓は…」

俺は啞然となる。

「まあ慣れてください。それよりも朝食用意したので食べてください」

ミリアの後ろのテーブルにいつのまにか朝食が用意されていた。

「えっ？朝食作ってくれたの！？」

「はい」

今この瞬間、俺のささやかな夢が叶った。俺の夢は、女の子に朝食を作ってもらうとゆうアホみたいな夢だった。夢が叶って、少しうれしかった。

これは絶対に食べないといけないと思いテーブルにいつてみると、テーブルには、トースト・オムレツ・サラダが置いてあったのだが…

「ナニコレ？」

おもわずそう言いたくなった。

「トースト・オムレツ・サラダです」

「それはわかってる。俺が言いたいののは、この料理の色だ！」

まず、トーストは焦げているわけでもないのになぜか黒い。煤でも塗りたくってるんじゃないかというほど。……よし。これは百歩

どころか億歩ほど譲るとしよう。だが、問題はここからだ。

料理界に反逆もしくは革命を興したいのか、オムレツと呼ばれていたそれは緑色へと突然変異していた。……無理矢理改造実験をされた成れの果てか。それとも、自らの不幸を深く嘆き悲しんだ挙句、色を変えろという暴挙にでたのか。そのどちらなのかわからない。どちらでもないのかも知れない。ただ唯一わかることは、彼はオムレツこんな姿になるために生まれてきたのではないということだ。

そして次に……サラダ。……なぜだろう。涙が止まらない。それは哀愁を誘う姿だった。野菜が、全部色が少しずつ変化しながら蠢いている。……遺伝子改造されたのか、それとも何かの実験の産物なのかはわからないが、わかることは普通に料理をしてできない代物であることと、このサラダは恐らく人が食える代物ではないということだけだ。

これらは食べられる代物ではない。もし食べたら人間としてなにか大切な物を無くしてしまうような気がする。

そう判断した俺は、

「作ってくれたのは嬉しいんだけど……今お腹すいてないんだ……ごめん」

俺は、丁重に断った。が、

「カノン君……なんで嘘をつくんですか？冷蔵庫開ける前に……腹減ったな」って言ってたじゃあないですか。……私、悲しいです」

そう言ったミリアの瞳から涙が流れていた。

「なっ―」

「あれ？ごめんなさい。泣いたってカノン君を困らせるだけなのに」

ミリアは気丈な微笑みを浮かべると、涙を止めようと必死で涙を拭いていたが、涙は止まらず、堤防が崩壊したように流れ続けていた。

そんな泣き顔を見せられた俺にできることは、

「ミリア、こっちこそ嘘をついてごめん。せつかくミリアが朝食を作ってくれたのにその好意を無駄にするみたいなこといって本当にごめん」

土下座して謝罪することしかできなかった。

「ちょ…カノン君、土下座までして謝らなくてもいいから。もう私、気にしてないから」

「……許してくれるのか？　ありがとう」

ミリアに許してもらったので俺は土下座を止めた。

「そういえば、嘘をついた理由聞いてなかったわね。なんで嘘をついたの？」

彼女は、ふと思い出したように聞いてきた。

「うっ…、そ、それは……秘密だ」

俺は、言葉につまってしまい、とつさに秘密だと言ってしまった。
本当のことなんて言えるわけありません。

だが当然ミリアは、納得するはずもなく、

「えー教えてよ」

しつこく聞いてきた。

「そんなことよりもそろそろ朝食を食べたほうがいいと思うんだけど冷めちゃうし」

自分でも自覚するぐらい露骨に話題を変えようと試みた。

「そうね。あまり時間がないし朝食を済ませちゃわないと」

そう言うと、ミリアは俺を見て、

「カノン君、そのベットに座って両手を前に出してください」

「えっ、なんで？」

「いいから、いいから」

なんだかわからないが取り敢えず言われたとおりベットに座って両手を前に出すと、

「えっ？」

俺の手首辺りでカチャという音が聞こえた。

自分の両手首辺り見てみるとそこには、金属製の腕輪がついていた。俗にゆう手錠が…

「ちょ…なにしゃがる!？」

俺は、いきなりの手錠拘束でパニックになってしまった。

「その状態では、朝食を食べれませんよね？」

手錠を掛けた張本人は、こちらの質問には答えずそう言った後、テーブルの上の朝食のサラダをフォークで突き刺して、こちらに歩いてきた。

「カノン君。あーんしてください」

ミリアは、俺の口元にさつきフォークで突き刺した野菜を持ってきた。

「私の怨拉印オンラインは美味しいですよ。新鮮な品種改良をした野菜を使っているところが売りで食べた人が毎回、「昇天しかけた…」って言うってくれるぐらいの好評な料理なんです…。なぜか一回食べてくれた人は、もう二度と食べてくれないんです。さあ早く新鮮なうちに食べてくださいね」

この話を聞いて食べた後の惨劇を悟った俺は、「嫌だ」と言おうと口を開けた瞬間に閃光のような早さで野菜を口に入れられ飲み込んでしまい急激な眠気に襲われ、俺はベットに倒れた。

.....

俺は、黒い世界にいた。

そこには闇と静寂しかなかった。

闇が俺を永久の眠りに誘い、静寂が俺に絶対の安らぎを与え、

そしてその二つがこの黒い世界に俺を取り込もうと闇が侵食する。

そして…俺は黒い世界に取り込まれ消え……

俺の物語は、H A P P Y E N Dで終了した。

めでたし、めでたし

「って全然めでたくねえよ！！なんだH A P P Y E N Dって！？
どう考えても完全にB A D E N Dじゃねえか！！ってかその前に

死んでたまるかあああ！」

俺は、死の淵から蘇り、闇の中で大声でさっきのHAPPY ENDに対してツッコむと闇の世界が一転して光の世界に変わったのと同時に俺は世界から弾き出されまた意識を失った…

ひつく、ひつく…

目が覚めると、噤り泣く音が聞こえてきた。

「うつ…」

「よかった…気が付いたんですね」

声のした方を見るとミリアの泣き顔が見えた。

「俺は…一体…？」

俺はどうやらベットで寝ていたようで身体を調べてみると汗で服が濡れていた

「ごめんなさい…！」

「ちよつ…何でいきなり謝るの!？」

「私の料理を食べたばかりに…」

「？ 俺、ミリアの料理なんか食べたっけ？」

「…もしかして憶えていないんですか？」

「手錠をかけられたところまでは、記憶にあるだがその後は憶えてない」

俺がそう言つとミリアは、

「いえ…私の料理を食べてあまりにも美味しくて危うく天に召されそうになったんです」

それは言い方を変えると、

「…つまりもしかしたら俺、天に召されかけてたってこと！？」

「そうなりますね。さっきまで痙攣していて顔を青白くつてとても苦悶な顔してましたね」

ミリアの説明でとても危険な状態だとゆうことがわかりました。

つてゆうかそれ、絶対に料理が不味くてなる表情じゃねえか？

「まあ今度食べさすときは、天に召されない程度の美味しさだと助かる」

「はい！頑張ってみます。今回サラダに使った自白剤の量が少なすぎたので、今度は適量で作りますから楽しみにしていてくださいね」

なんか変な物の名前が聞こえたような…

「……さっき、聞き間違いだと思うが…自白剤使ってるって言った？」

「言いましたよ」

「なんでそんな物が入ってる!？」

「私、まだカノン君ことを何も知らないから知るために手っ取り早く使っんです!」

この発言に恐怖を感じた俺は、

「頼むから普通に知ってくれ」

と、言う

「…わかりました。そのかわり毎日朝食を作りにくるから、それを許してくれないなら四六時中付き纏います」

「……………朝食のほうでお願いします」

俺は、少し思案してから言った。朝食は朝食で危険だがまだ四六時中付きまとわれるよりマシだ。四六時中なんて付き纏われたら俺、確実に精神崩壊起こしてしまうだろうからな。

「……………ところで起きたときから聞きたかったことがあるんだが……いい？」

「なんですか？」

「なんで俺の横で寝てる!？」

さつきから色々なことが起きて言いそびれていたことをようやく言
った。なんとなく理由はわかるが違うことを祈りたい。

すると、

「カノン君が倒れている間に既成事実でも作ろうかと思って」

「……………」

俺の考えていたのと同じ返答が返ってきました。

なんかもう疲れてきたので、ふと時計をみるとそろそろ入学式行か
ないとヤバい時間でした。

「俺もう行くよ」

俺はそう言って、急いでベッドから這い出て部屋を出ようとするど、

「私も一緒に行くわ」

ミリアの声が聞こえたが無視して部屋を出た。

(続く)

第1話：後編

男子寮を出て五分後、入学式が行なわれる体育館に着き、さらにその五分後に入学式が開会し、新入生入場となった。

「新入生、入場してください！」

体育館からアナウンスが聞こえてきたので指示どおり、新入生は入場を開始した。

パチパチパチ…

と、先頭の新入生が会場に入ると同時に会場から拍手が聞こえてきて、

「うわああ〜」

「ひえええ〜」

「そして誰もいなくなりましたか？」

と、悲鳴と意味のわからない声が聞こえてきた。

なにあの悲鳴は！？　　つてか最後のなに！？

俺も周りもなにが起きているのかわからない表情で体育館入口を見たが、暗幕が掛かっており何も見えない。

困惑しているうちに、自分の前の人がちょうど入場するところだった。

自分も慌て入場してみると、

「…なに…これ!？」

俺は、絶句した。体育館の壁のいたるところに赤い液体みたいなものが付いているではないか。床には折れた剣や薬莢などが散乱しており、入学式を行うにはなにか間違っているような空間が広がっていた。

恐れと不気味さを感じながらも、新入生は全員入場し、用意された椅子に座った。

「校長先生から新入生にお祝いの一言」

司会の人がそう言うと、壇上に笑みを浮かべた五十代に見える男性が上がってきた。

「新入生諸君、入学おめでとう。三年間適当に頑張って勉強してください」

校長は教育者が言うべき台詞ではないことを言って、それだけで壇上から降りようとして、

「あっ!」

と、言って壇上に戻ってきた。

「言い忘れてたけど、この体育館の惨状には理由があるからね。今朝がた十人の生徒がここで争ってこんなふうになってしまったんだ。ホント迷惑だよ」

校長の顔は、全然迷惑そうではなさそうだった。

「それで騒動の原因がね、コーヒーかトマトジュース、どっちが朝食の飲み物に相応しいかって体育館で議論しているうちに喧嘩になって、全員病院送りで決着がついてね、事後処理をしようにも時間がなかったのもそのまま決行しちゃいました。新生には、多大な迷惑をかけてしまいもうしわけない」

校長はそう言い終わると壇上から降りていった。

「次は、在校生代表から新生に歓迎の一言」

司会の人がそう言うと、壇上に薄汚い黒衣を着た長髪の男性が上がつてきた。

「ひっ、ひひひっ！ 新生、くっ、首を、いつ、一緒に絞めよう…！」

そう言っていきなり黒衣のポケットから紐を取り出すと、首に巻き付け首を絞め始めた。

一分後…

どゅっ

そいつは当然だが意識を失い倒れた。結局…どこが新入生の歓迎の言葉で、何がやりたかったのかわからなかった。

「…壇上のゴミを片付けるので少し待ってください」

司会の人はそう言うと、壇上にはいつの間にか全身に包帯を巻き付けた人が上がっており、倒れているそいつを黒いゴミ袋に入れてそれを担いぐと、体育館から出ていった。

五分後…

「お待たせしました。次は、新入生代表者による答辞をしてもらう予定だったのですが、取り止めて学校について説明をさせてもらいます」

司会の人に戻って来てそう言った。

まあ…新入生代表の答辞がなくなって、時間短縮になるのはいいが、それよりもあのゴミと呼ばれた人はどこに持っていかれたのが凄く気になる。

「それでは、学校について説明させていただきます」

そんなことを考えてるうちに、壇上に男性が上がってきた。

「まず始めに、新入生諸君に自己紹介しておこうか。我は、生徒指導の担当のルーフ・ディスタだ。我の呼ぶときは、美しきルーフ様、もしくは、全知全能なるルーフ先生、と呼ぶようにしろ。…それよりも…なんて美しいんだ。我は…」

そう言つて、自己紹介が終わると、壇上で自己心酔モードに入ってしまったようだ。まあ、さっきの自己紹介を聞いて判ったことは、このルーフとゆう先生がかなりのナルシストであることと、生徒指導の先生ということだけが分かった。なんか見ていてこんな風には絶対なりたくないってゆうか、すげー表情がキモいと思つていると、

「ルーフ先生、自己心酔するのは結構なんだけど、先に学校説明をしてくださいな」

校長が注意する。すると、

「はっ、…すまない。自分のあまり美しさに酔い痴れてしまった。…本題に戻る」

言われて自分の失態に気付いたようで、さっきまでキモい表情をしていたとは思えない凜々しい表情で謝罪した。

「まずは、この学校の学科について説明しよう。君達も知つてると思うが、この学校には5学科あり、医療科・異能科・幻獣保護科・戦術科・進学科がある」

そう言つと、舞台裏からホワイトボードが運ばれてきて、ホワイトボードには、

医療科は、名前のとおり病気の治療を学んでいく

戦術科は、戦術の有効性の検証したり戦術を学んでいく

異能科は、先天性もしくは後天的に身に付いた自身の能力の強化・コントロールなどを磨いていく

幻獣保護科は、貴重な生物や希少な動物を絶滅や乱獲者などから保護できるよう知識や判断力を養う

進学科は、進学するにあたっての知識を養ってもらう

補足説明

1 医療科と戦術科は、編入試験を受ければ進学科に編入ができる
2 異能科と幻獣保護科は、戦闘訓練があるので訓練中に万が一、死亡するようなことはあっても本校は一切責任は負いません。武器は、本校が用意しますので必要なし

3 異能科と幻獣保護科は、退学・編入は出来ません

4 異能科と幻獣保護科の質問には、一切答えません

以上

と、書かれていた。

「説明を言うのが億劫なので書いてきた。分かりやすい説明だろ？」

そう言うと、ホワイトボードは舞台裏に戻された。戻すのかよ。

ん？確かに分かりやすいんだけど……なんなんだろう、あの補足説明の内容は？　なんか異能科と幻獣保護科が他の3科に比べておかしくないか？

「質問はないようなので、これで私の説明は終わる」

そう言つて舞台から降りた。

「これにて、入学式を終わります。と、言いたいのですが終わる前に、表彰式をさせていただきます」

「え……、まだあるのかよ」

ようやく終わると思つていたのに、司会の人発言に全員ブーイングの嵐です。

「名前を呼ばれた人は、壇上に上がってください」

司会の方は、周りからのブーイングを無視して話を進めた。

まあ、俺は表彰されることはしてないし、名前なんて呼ばれることはないので寝ようかなと考えていると、

「カノン・ストレイト」

「へ？」

「以上」

なぜか名前を呼ばれた…俺なんかしたっけ？ 表彰されるようなこととしてないんだけど、…その前に表彰者、俺だけかよ！

まあ、呼ばれたので壇上に上がる。

壇上に上がると、四人の同じ般若面と黒いジャケットを着た人と校長がいた。

…なんだろうかこの般若達は。スゲー違和感あるんだけど。そしてなんか視線に殺意が込められてるような気がするの、気のせいだろうか…

この般若面達の様子を伺っていると、

「彰状授与。あなたは、本校の処分したかった変態、ダーティ・パラノイアを処理した功績を讃え、これを表す。聖マティア学園高等部校長、リオン・ハーツ」

表彰が始まりようやくなんで表彰されたのかが分かった。ダーティを倒したことで表彰されるとは予想外だった。

「本当に、ありがとう」

校長から差し出された表彰状を受け取り後ろに下がろうとすると、

「これで表彰式は、終わり閉会…」

「これより公開処刑を始める…!」

「げぶつう!?!」

校長が閉会宣言が言い終わる前に、誰かの声が割って入ったのと同じ時に、背後に鈍い衝撃を受け俺は地面に倒れた。

「な、なにしゃがる!?!」

顔を上げると、さっきの般若面達が俺を取り囲んでゴミを見るような目で見下ろしていた。

「公開処刑をしている。貴様は、我らが尊敬するダーティ・パラノイア先生を亡きものにしたんだ…これは報いだ！」

言い終わると同時にまた攻撃を再開し、

「げぼっ…げぶっ…ぐはっ…ぐへっ……」

俺の意識は薄れていった。

……………

目が覚めると、自分の部屋のベッドで寝ていたことに気付く。

「ふあゝああ……」

俺はベッドから身を起こすと大きな欠伸をした。

「俺はなんでこんなところにいるんだ？ 確か俺、あいつらにボコられてたはずなのに…うん？」

誰か運んでくれたのかと考えていると、ベッドの隣の棚に手紙が置いてあることに気付いた。その手紙を読もうと手に取る。

手紙には、

『カノン君のことだから気絶したあとどうなったのか気になってい
ると思うので、書いておきます。気絶したあと、すぐに先生方が割
って入って鎮圧されましたが、相手はお咎めなしになりました。仕
返したいと思っていますと思うので、あの般若面達は私がきつちり
仕返ししておきます。だから安心して寝ていてくださいね。報酬
については何ですが、今日までに、全員に仕返しができたら私と結
婚してもらいますね。約束ですよ』

読み終わると、外から、

ズダアンツ！

「ひやはははは」

銃声と笑い声が、聞こえてきました。…笑い声に聞き覚えがあるよ
うな気がしたが気のせい…にしたいなあホント……。

「……………まさかな…」

脳裏に嫌な光景が浮かんできたが、考えすぎだろうと笑い飛ばそう
としたが、

「そこに隠れてる般若面さん出てきてくださいよ。私とカノン君の
未来の為に、仕返しさせてくださいよ。さもないと…」

チュドゥンツ！

「うわっ！？」

「爆死してもらいます」

どうやら考えが合っていたようで、外にいるのはミリアと般若面のようだ。その爆音を聞いて放心しつつも、

「今つて何時だ!？」

ハッと我に返り、急いで時計を確認する。

【0:00】

「あれ…？ 時間すぎてる!？」

なんと時間はもうすでに過ぎていた。

「……………もしかして止まってるのか？ ……あつ、針が動いた」

一瞬、止まってるかと疑ったが、針が動いたので、止まってるわけではないようだ。わかったことは、

「よし。これで、手紙の報酬の約束はなしだ!」

であった。まあ、正直言っただけじゃなく、約束じゃないんでけどね。

その後、寝ようかとおもったら、爆音が煩くて眠れなかった。

二日連続で不幸な日だった。

(終 わ り)

第2話：前編

「いつまで続くんだよ…これ…」

入学式から2日休みが明けた今日。本来なら今日から授業があり、もう学校に行く時間なのだが……俺は、学校に行くのではなく部屋に引きこもっていた。その理由は、

コン、コン

「カノン君、いい加減ドアを開けてください」

このドアの向こうから聞こえてくるこのミリアの声が原因だった。

…なぜこんな状況になってしまったんだろう。ここは一つ回想してみても、なんでこんな状況に陥ったのか考えてみよう。

それは、入学式が終わった翌日のお昼頃のこと。

その時俺はまだ眠っており、ドアをノックする音で目を覚ましたのだ。

「ふあゝああ…誰だよ？」

俺は欠伸を噛み締めながらドアを開けると、

「カノン君こんにちは」

そこには満面の笑顔を浮かべたミリアがいた。右手に出刃包丁を。左手に注射器を持って…

バン！！

それを見た俺は、即座に壊れるんじゃないかというほどおもいつきリドアを閉め、チェーンロックを急いで掛けた。

「ハア…ハア…！」

なにか、寝起きにとんでもないものを見たような気がする。……うん。そうか俺はまだ寝ぼけているんだ。そうに違いない。そうだと決めさせてくれ。

俺は洗面所に向かい顔を洗うと、もう一回、真偽を確かめてみよう。とチェーンを外しドアを開けた。

「カノン君こんにちは」

さっきと変わり無く、ミリアが右手に出刃包丁を左手に注射器を持って立っていた。

「……おはよう」

とりあえず、挨拶されたので挨拶を返した俺は、これが現実だと認

めるしかなかった。

「で、カノン君。私に謝ることはありませんか？」

「えっ…、謝ること？」

突然なんなのだろう。疑問に思う俺に構わずミリアは続ける。

「そう。謝ることです」

「いや、ないと思うけど…、もしかして…俺なんかした？」

俺がそう言つと、ミリアはさっきまでの笑顔とは打って変わって、怒った表情でこちらを睨んできた。

「はい。しましたよ。…そしてこれはその罰です！」

ミリアは、言い終わると同時に左手に持っていた注射器を俺の右腕にめがけて振り下ろしてきた。

「うわっ！？」

俺はとつさに後ろに下がったおかげで注射器は空振りになる。

「なっ！？ なにしゃがる！」

「もう躲さないくださいよ。躲したら罰にならないじゃあないですか」

「いやいや躲すから、ってか罰ってなんだよ！？ いったい俺がな

にをしたっていうんだ！ 頼むから教えてくれ！」

いくら考えてもわからないので思い切って聞いてみるとにした。すると、

「まだわからないですか…まあいいでしょう。教えてあげます。朝食を作らしてくれませんでした。それが理由です」

と、言いやがった。当然俺の反応は、

「はっ…？ え、なに？ ……俺は、そんな理由で、こんな状況にあっている…だと…？」

唖然となる。なんだろうそのくだらない理由は、ありえねえ、思っている、ミリアが、

「理由がわかったことですし…続きを…」

バン！！

近づいてこようとしたので、俺はドアをおもいきり閉め鍵とチェーンロックを掛け直した。

チェーンロックを掛けた直後ドアの外から、

「ちょっとなんでドアを閉めるんですか！？」

「えっ……なんとなく閉めたくなつたから」

ミリアに理由を答える。まあもちろんこれが本当の理由ではないで

けどね。本当の理由は、これ以上係わりたくないののでドアを閉めた
つてのが本当の理由。

だけどミリアはそれをどう受け取ったのか、

「…カノン君、私が好きだからこんなイジワルしてるんですね？」

とか言ってきた。

「何——」

「やっぱり。そうなんですね。やった！ 私達、相思相愛だったんですね！」

俺が『何を言ってるんだ？』と言おうした瞬間に勝手に話が進んで
しまい相思相愛になっていた。何かこのまま話が進んでいくと取り
返しがつかないことになりそうなので、俺は、思い切って、

「勝手に勘違いしてるようだから言つときます。俺は、ミリアのこ
とは、先輩としか思えないから恋愛対象には見えません」

本心を口にした。

数秒の間の後、ドアの向こうから、

「今…なんて言いました…？ 何か、狂おしいほど愛しているから
今すぐミリアを抱き締めないと死んでしまう…ですって…？」

俺が言ったセリフはミリアの言語変換能力により明らかに違うセリ
フになっていた。

「今すぐ抱き締められに行きます!!」

ドアの向こうからそんな声が聞こえてくる。

「く、来るなー!」

俺は冷や汗だらだらで後ろに後退りした。

ガチャガチャ

ドアの外から鍵を開ける音が聞こえてきた。

……非常にヤバイ。確かミリアは合鍵持ってたからドアを開けられてしま……あれ? なんかおかしくないか……? なんでミリアは俺の部屋の合鍵を持ってるのに、なんで朝食を作れなかったんだ?

ふと疑問に感じたがその疑問はすぐ解けた。なぜなら、

「なんでさっきから鍵が合わないのよ!? あーっ! よく見るとドアそのものが昨日と違う!」

と、言う声が聞こえてきたからだ。

ドアを確認しに行ってみると、

「あっ! 本当だ……」

本当にドアが変わっていた。昨日はドアの取り付け口が錆びていたのに、今確認すると錆などなく真新しくなっている。ついでに、ド

アの近くに置いてあった部屋の鍵も別の鍵になっていた。

「……はっ！ わかりました。私の愛を試すためドアを替えたんですね。これぐらいの障害を乗り越えなければカノン君を愛する資格はないってことですね？ わかりました。それならご期待に応えさせてもらいます」

ドアの向こうからドアを替えた理由を自己で結論づけ、更にさっきよりも勝手にテンションが高くなったと思われるミリアの声が聞こえてきた。

「……ドアなんか替えた覚えはないんだがね。誰なんだろう……替えたのは。」

と、部屋の片隅で考えていると、

「カノン君、もしドアの近くにいたら5秒以内に離れてくださいね」

ドアの向こうから聞こえてきました。

「……な、何をするつもりだ？」

何かとてつもなく嫌な予感がしてきた。

「決まってるじゃないですか。爆破してドアを開けます」

当たり前のように言われた直後、ドアの方から爆発音が轟きました。

爆発は1分ぐらい続き、沈静化してきた頃を見計らって耳から手を

離れた。

俺は、恐らく消し飛んだと思われるドアがどうなったのか気になったので確認しに行くと、

「…………あれ？」

ドアはまだ健在だった。あれだけ爆発を受けたのだから跡形もなく無くなっていると思っていたのに、壁に罅も入ってないどころかドアもへこんですらない。……………ってか、今さらだけどミリア、なんで爆弾なんか大量に持ってんだよ…………。

「カノン君、酷いです。このドア爆破出来ないじゃあないですか！」

と、言う声が聞こえてた。

いや…、俺に爆破出来ないと言われても困るんですけど…。それにドアを替えたの俺じゃあない誰かし…いや、けどそのおかげで今、助かってる…………いやいや、元はと言えばその誰かがドアを替えたのが原因でこんな…………

と、そんなことを考えていると、

「もう私も手段を選びません。こうなったら能力を使います」

ドアの向こうから聞こえてきました。

「能力！？ ミリアも能力持ってるの！？」

「はい。言ってますでしたっけ？ 私が異能科に所属していて、

能力はテレポーションだってこと？」

初耳だった。

寝耳に水だった。

ミリアはある意味、今の俺にとっては死刑宣告に近いことを言いやがった。

「今、行きますからね」

ミリアは、そう言い終わると、ドアの向こうから微かに音が聞こえてくる。どうやら能力を発動させたようです。

俺の脳裏に、これから起こりうる最悪な展開が浮かんできた。

数秒後…、

「……あれ？ 来ない、な……」

ミリアは、部屋のどこにもいなかった。どうしてなのか考えていると、

「あれ？ ……なんで、テレポーション使ったのに私はまだドアの前にいるのよ!？」

ドアの向こうからミリアの声が聞こえてきた。

どうやら能力の使用をしてもなぜだか部屋に入れなかったようである。その後も、何回か能力を使っていたようだが部屋の中に入れな

かったので失敗に終わったようだ。…俺的には、凄く助かりました。

「カノン君、私の負けです。ドアを開けてください。」

コン、コン

今度は、正攻法にこちらにドアを開けるように頼んできた。

「……………」

俺は、なんかもう、今までのやりとりで、もうしんどくなってきたので、ここは思い切って、ミリアがドアの前から消えるまで籠城することに決めた。

そして、今日に至る。

今は、実に最悪な気分だ。夜もノックの音がうるさくて寝不足になり、もともと部屋に食材が置いてないので食べれる物が作れないため凄く空腹だ。

「カノン君、今日から学校なんですからいい加減出て来てくださいよ」

と、ドアの向こうから約まる二日、俺が籠城をするきっかけになった人物の声が再び聞こえてくる。

「…確かにな」

俺は、それを聞いて納得した。確かに、授業初日を欠席をするのは気が引けるし、多分学園に購買部ぐらいあるだろうから空腹を満たすために学校に行くことにした。

「さて、準備するか」

俺は、ベッドから起き上がり、まず最初に顔を洗いに洗面所に向かい、次に服を着替え、最後にカバンに今日必要な物と部屋の鍵をつめました。

「行くか…」

俺は、ミリアがいるドアの方には向かわずに、真逆の位置にある窓に向かう。そして窓を開けて外に飛び降りた。

今度は、ミリアの部屋から逃げたときみたいに慌てていなかったの
で、背中から落ちずに普通に着地できた。

そうして俺は、学校に向かったのだった。

余談だが、籠城一日目にふと入学式のときに貰った表彰状を見ると、裏に何か文字が書いてることに気づいて裏返してみると、そこには、

【カノン君、君はこれからダーティ先生を崇拜する生徒に襲われ続けると思うので、せめて自分の部屋では気が休まる生活をさせてあげようと思い、部屋の壁の耐久性の強化と能力無効化の結果、ドア

を特殊合金製にしてピッキング不可能なうえ複製困難な鍵にしときました。なお工事費用は、君の銀行の預金から差し引こうかと思っただけどダーティ先生の処分をしてくれたから止めといてあげるよ。

byリオン・ハーツ】

実は、犯人が判明してたりして。

……マジ、ありがとうございます。校長先生様！

（続く）

第2話：中編

ぐ
……

「……腹が減った」

聖マティア学園高等部異能科一年の教室の、外側の窓際が一番後ろの席という好ポジションに座った俺は、机に頭を乗せてぐったりとうつ伏せ状態になると、寮に居た時よりも更に酷くなった空腹感と戦っていた。

この空腹が酷くなったのには理由がある。

学園の校舎に着いた後、下駄箱に靴を入れ、鞆から上履きをだし、それに履き替え自分の教室に向かおうと右を向いたら、偶然にも正面に購買部を発見し、パンと飲み物が売っていたので寄ってみたわけなのだが。

「あの、すみません。あんパンと牛乳ください」

「210フォンになります」

俺は財布を取出し、お店の人に代金を払った。

「お買い上げありがとうございます」

俺は買った物を受け取ろうと手を伸ばすと――

ぽんぽん。

と。

誰かに背中を叩かれた。

「ん？」

後ろを振り返ると、

「……ようやく会えましたね。さあ今すぐ私を狂おしいほど抱き締めてください！」

そこには、今、最も会いたくない人物 No. 1……ミリアが立っていた。ようやく会うことができたのと俺に抱き締めてもらえると信じて疑っていないのか、凄く幸せそうな顔をしている。

「……い、今、ちょっと急いでるから……さようなら！」

その言葉を聞いてドン引きだった俺は、この場から逃げるために左向け左をし、全力で駆け出した。

「あつ……。ま、待ってください！」

ミリアはなぜか俺が逃げるとは想定していなかったようで、慌てて俺の後を追ってくる。

「ちょ、買った商品忘れてますよ！」

後ろから購買部の人の呼び止める声が聞こえてきたが、今は買った物を取りに戻るよりも自分の身の方が優先だ。涙を堪えて腹の虫の悲鳴と共に無視した。

俺は階段を上がったり下がったりとしばらくがむしゃらに走り続け、ふと後ろを見てみるとミリアはいなくなっていた。どうやら撒いたようである。

「ハア…ハア…！」

俺は足を止め、きよろきよろと辺りを見回した。

……ここ、どこだ？

がむしゃらに走りすぎたようだ。自分がどこにいるのかがわからない。

ミリアを撒いた後、自分の教室に行こうと思っていたがこれでは行けないな。

仕方ない。誰かに教室の場所を聞こうと思つてると、前方に銀髪のショートヘアの女生徒が歩いているのを見掛けた。

ちょうど良い。俺はその女生徒に教室の場所を聞こうと近付いた。

「すみません。ちょっといいですか？」

「ん？ なにか用？」

女生徒が、後ろを振り向いた瞬間、

「えっ……ミリア!？」

と、俺は驚きのあまり悲鳴のような声を出してしまった。

振り向いた顔は、銀髪とショートヘアを除けば、俺がよく知っている人物、ミリアと瓜二つだったからだ。

ナニコレ？ ドウユウコト？

俺が、全くの予想外の事態に混乱していると、

「あのー、もしもし?」

彼女は俺の目線に手をヒラヒラさせてきた。

「……………はっ!」

それにより混乱から抜け出せた。

「す、すいません。あまりにも知り合いに似てたもので」

俺は、こちらから声を掛けたのに相手を困らせてしまったことを謝った。

「いえ、別にそれは構わないんだけど。……それよりも、さっき私の顔を見たときミリアって言ったよね？ その知り合いってもしかして、金髪のロングヘアで黒色の犬型の突然変異種の夢魔を飼っ

てます?」

「えっ? う、うん。そうだけど、なんで知ってるの?」

「やっぱり……。それ、私の姉さんだわ」

イマナンテイイマシタ?

俺は背中から嫌な冷や汗がでるのを感じながら、

「……………え、えっとつまり君の姉さんって……………」

自分の脳裏に浮かんでいる答えと違ってくれと祈りながら、絞りだすような声で尋ねた。

「ミリア・ウィルヘルよ」

彼女は、見事に俺の期待を裏切ってくれた。

裏切り者め!

「……………さようなら」

それを聞いた俺は回れ右をし、彼女に背を向けて逃げだした。

「ち、ちよつとなんでいきなり逃げ出すのよ!?」

彼女も慌てて追い掛けてきやがった。

… 何で逃げるかだって? 決まってるじゃないか。ミリアの妹だから

らだよ。姉があんなだったんだ。もしかしたら妹はそれ以上に厄介な存在の可能性があるから逃げるんだよ！

こんなのはただの疑心暗鬼だとは自分でも判っている。だが、いったんそう思ってしまうとなかなかそのイメージは簡単には拭えないのだ。

俺は廊下の先に見える階段に向かって走っていたが、

「捕まえた！」

すぐに後ろからミリアの妹に背中に飛び付かれ、逃亡を阻止されたうえに、

ぐしゃり。

飛び付かれた反動で前に倒れこみ、生々しい音を奏でて床にキスをするハメになった。

「ぐぎゃあ！」

俺は、顔面の痛みにとうち回りそうになりながらも、まだミリアの妹に背中を抱きつかれてるため思い通りに動かせなかった。

「ご、ごめんなさい。大丈夫！？」

ミリアの妹は、慌てて俺の背中から離れ、俺の顔の様子を確かめた。

「見たところ、鼻血は出てませんし鼻骨を骨折してないようなので大丈夫……なわけないよね。……本当に、ごめんなさい」

彼女は、深々と頭を下げて謝ってきた。

そんなに丁寧に謝られると、こっちが申し訳ない気持ちになってくるので、鼻を押さえて痛みに耐えながら、

「いやいや、悪いのこっちだから。俺が逃げなければこんなことにならなかったんだから自業自得ですよ。だから、謝らないでください」

って言うしかなかった。まあ実際、ホント自業自得ですしね。

「それにしても、何で逃げたのよ？」

「あー……それは……」

「まあ、理由は大体想像できるけど。さっきの反応から察するに、姉さんの異常な行動を見てしまい、妹の私も何処か異常な可能性があると思い逃げた。……違う？」

「……正解です」

流石ミリアの妹さん。良く姉の性質を理解されていらっしやる。

「それにしても、さっき遭ったばかりの見ず知らずの人に勝手に異常だと思われるのって、結構傷付くものね……」

「うつ……」

彼女から悲しそうな顔で言われて、俺は言葉が詰まってしまっ

「いや、本当……すみません。面目ないです」

って、謝るしかなかった。

「……まあ、許してあげます。けどなんかスッキリしないわねえ……」

彼女は、そう言って暫く考え込み、ふと、

「そうだ。付き合ってくれない？」

などと言ってきた。

……………。

流石にこれには呆然となってしまう。

彼女は呆然となった俺の顔を暫く不思議そうに見てきたが、自分が言った意味にようやく気付いたのか、彼女の顔が、みるみる赤くなっ
つていき、

「ち、ちがうわよ！ と、友達としてという、い、意味だからね！」

必死な顔で、両腕をバタバタと振り回して否定してきた。

その仕草は、見ていてとても愛らしく思えた。

「と、とにかく、付き合ってくれるの、付き合ってくれないの？」

俺は、しばらく考え、

「…返事をする前に聞きたいことがあるんだけど、いい？」

と、返事をする前に少し気になることを聞くことにした。

「なに？」

「なんでいきなり友達になろうって話になったのか話の流れが分からないんだが…」

さっきから気になっていることを聞いてみた。

「そういえば、そうね。簡単にいえば、私が異常じゃないって言っても言葉だけじゃあ証明にならないから、私の行動を見て判断してもらおうと思って。友達になったら私の行動を見る機会が増えるし」

うん、正論だ。その人の他人の評価なんて意味を持たない。自分でしっかり向かい合ってこそ、その人の評価ができるのだから。

「そうゆことなら、断る理由はないな。これからよろしく」

俺は、非常に納得してそう答えた。

「ええ、こちらこそよろしくね。……えっ…と…そういえば、お互いに名前聞いてなかったわね…」

「あっ、…なんか重要な部分飛ばして友達になっちゃたな」

「ふふ、そうね」

お互いに笑いながら、簡単に自己紹介をする事にした。

「俺は、カノン・ストレイト。一年の異能科」

「私は、シア・ウィルヘル。一年の進学科よ」

「それと友達らしく呼び捨てでいいので」「

なんか見事にハモっちゃいました。

「…そういえばカノン、さっき私を呼び止めたけど、何の用だったの？」

シアは、ふと思い出したように聞いてきた。

「ん？ ああ、あれか。いや自分の教室が分からなくなったから場所を聞こうと思って」

俺も本来の目的を思い出し、そう答えた。

「異能科の教室なら進学科の教室の隣だから、戻るついでに連れて行ってあげるわ」

「ありがとう。シア」

こうして二人で、他愛のない話をしながら歩き、目的地に辿り着いた。

「ここが、異能科の教室ね。じゃあもう行くわ」

「シア、ありがとうな」

シアを見送ってから教室に入り、黒板に書いてある、自分の席を捜し当てその席に座り、そして――

さっきの空腹感との戦いに戻る。

なんか回想に無駄に力をつかったせいかな、余計に空腹感が酷くなっただなと思つてると、

キ・ンコ・ンカ・ンコーン
授業開始のチャイムがなった。

（続く）

第2話：後編

チャイムが鳴り終わってからしばらくすると、教卓に前触れなく急に何かが現れた。

「やあ、初めまして。今日から君らの担任をすることになったエンリコだ。一年間よろしく」

「……………」

担任はみんなに挨拶をしてきたが、誰も挨拶をしかえさなかった。いきなりの登場で面食らっているのもあるが、その担任はなんと、

「…ぬいぐるみじゃないか、あれ…」

誰かが俺の心のセリフを代弁してくれたようなタイミングで、そんな囁き声が聞こえてきた。

そう、ぬいぐるみなのだ。サイズは40センチぐらいで、形はそこからよく売ってそうな安物のウサギの出で立ちなのだが、しかし、なぜか片方の耳が千切れていて、目から赤、口からは黒の液体が垂れたような跡がある。

そしてそれは疑いようもなく動いていた。

「みんな、聞こえなかったのかな？　じゃあもう一回言っね。初め

まして。今日から君らの担任をすることになったエンリコです。一年間よろしく」

「……………よろしくお願いします」

みんな人形が動いているという不可思議な現象に対するショックからある程度立ち直り、今度は挨拶をかえすことができた。

「よろしい。さて、皆さん先生に何か質問があるかい？　あるなら手を挙げてね」

先生はみんなを見回しながら聞いてきたが、

「あれ？　誰も質問ないの」

誰も手を挙げなかった。まあ、当然だな。多分みんな、質問したいことは沢山あるのだろうけど、俺と同じで、質問したら何か後悔してしまいそうな気がすると感じているのだと思う。もし質問できるような奴がいたら見て……

「はい！！　エンリコ先生質問です！」

……………みたい……ものだ……………。

一番前の廊下側の席の奴が、天井に届くような勢いで手を挙げていた。

いたんだ……………。

というか、いるんだ……………。

「はい。何ですか？」

「あの……先生は、なんでウサギのぬいぐるみなんですか？ それになんで目から血涙のような物が流れたような跡があるんですか？ それと口から垂れたような黒い液体の跡は何ですか？ 最後に何で片方の耳が千切れてるんですか？」

彼は、例えるなら地雷源の地雷を残らず踏んでいくという、勇敢なのかもしくは無謀とも取れる質問を矢継ぎ早にした。

この瞬間、教室の空気が凍ったのはゆうまでないことだった。そして、恐らく皆の中で彼のあだ名が、KYY（空気読めない奴）に決まったことだろう。

「ああ、そのことか。だけどそれらの質問に答える前に話したいことがあります。実は先生オートマタなんだ」

先生は、自分の存在を話しはじめた。

「先生を造ってくれたぬいぐるみ師は、その道では有名なほうで、ある日この世に一品だけの愛らしいぬいぐるみを造ろうとしたんだ。まず形をぬいぐるみ師の好みのウサギにしたんだけど、これじゃあ普通のウサギのぬいぐるみと変わらないなと思ったらしく、個性をだす為に耳を片方千切り、目から血涙が出るようにして口からはイカスミが出るようにしたんだ」

先生は質問に答えてくれたけど、正直知りたくありませんでした。

「エンリコ先生、さらに質問なんですけど、それって確かに個性が

でたとは思いますが、愛らしさから逸脱してませんか？ それと、なんで目や口から血とイカスミがでるんですか？」

また、彼（KYY）が場の空気を読めない質問をした。……誰でもない。頼むから彼を黙らせてくれ！！

「そうなのかな？ 自分じゃあ愛らしいと思ってるんだけど……。まあ……いいや、次のイカスミや血がなぜでるか、自分にも分からないんだ。ぬいぐるみ師の人が、『不可能を可能にしたZE！！』としか言ってくれなくて」

何かこれ以上の先生のことに関しての質問は聞きたくなくなってきたな。

「先生への質問はこれくらいにそろそろ出席確認も兼ねた君達の自己紹介でもしてもらおうかな」

先生は出席簿を開き、書く準備を始めた。それにしても、考えてみればぬいぐるみが出席簿を記載している様子ってとてもシュールな光景だな……。

「じゃあ、まず君から順に前から後ろという順番で始めてください。あつ、能力名と効果は必ず言ってください」

先生は、彼（KYY）を腕を指して言った。

「自分は、バルドスブ・ヘルゴロスです。能力名は、^{ファイヤ}火です。効果は、こんなのです」

ポッ……

彼は、そう言っ、て、左手の人差し指に小さな火を灯した。

「で、得意なことは、場の空気を読むこと……」

その瞬間、

「嘘を言うなボケッ！」

「なにが長所だ！ 短所だろうカス！」

「帰レ帰レ帰レ帰レ帰レ死ネ帰レ帰レ帰レ帰レ帰レ帰レ……」

数々の反論が彼を襲っていた。

罵詈雑言ばかりだったが。

「……………」

「さて、次の人お願いします」

彼（KYY）はうつ向いて黙ってしまい、先生は何事もなかったように次の指示をだした。この先生も何気に酷いな……

次の人は女の子だった。

「私は、アリス・ジュエラーです。趣味は読書で、能力名……」

「おいアイツ…… インストール じゃね？」

彼女が能力名を言おうとしたとき、誰かの声が割って入った。

「あつ、本当だ」

「インストール って確か通り名で、コピー能力者だったよな……」

「ハッ、ただのコピー野郎じゃねえか」

最後の彼が言い終わったと同時に、

パリーン

どこかでなにかが砕け散る音が聞こえた。

「……先生、すみませんが二分……いや一分ほど、時間をいただいてもいいですか？」

アリスさんは物腰柔らかく先生にそう尋ねた。その時のアリスさんの表情は笑顔なのだが、なぜか見ていて恐怖しか感じられなかった。笑顔なのに……。

「うん？ ああ、それぐらいならいいよ」

先生はちゃんと空気を読んで了承した。

「さっきの4人ちよつと廊下に出て来てください。ちよつとお話がありますので……」

そう言っつて、アリスさんとそんな彼女に怯えて産まれたばかりの子

馬ばりに震えている4人は一緒に廊下に出ていった。

一分後…

「すみません、お待たせして。もう終わりました」

アリスさんが帰ってきた。それに続いて4人も帰ってきたが、

「……」

4人とも、夢や希望を失ったような顔をしていた。いったい彼らは一分の間で何をされたんだろう……まあ、分かることは彼らの身に想像を絶することがあったとゆう事だけである。

「では、続きをお願いします」

先生は気持ち良いぐらいのスルーをしてそう言った。

「はい。あつ、その前に……え…つと、あ、その外側の窓際の一番後の人ちよつとこつちに来て下さい」

「…えつ、俺!？」

彼女は、教室内を見渡し何故か俺をピンポイントで指名してきた。とりあえず、指名されたので渋々従う。

「そこに立って目を閉じてください」

言われた場所に立ち、目を閉じた。

すると、

「痛いけど我慢してくださいね」

「えっ…、イタツイダダアッ！　ち、ちよつとなにやってんの！？」

その瞬間、首筋に痛みと柔らかい感触。痛みのあまり目を開けてしまった。

「なにつて、血を吸ってるんですけど…」

しばらくして俺の首筋から口を離し、アリスさんは言った。

「血！？　なんで血なんか吸ってるの！？」

そのせいだろうか、なんか目眩がしてきた。

「私の能力つて、血が必要不可欠なので…そのためなんです」

「……………まあ、そうゆういうことならいいけど…」

ちゃんとした理由があるので許すことにした。それに目眩と空腹のせいで気分が悪くなってきたので、話すのがしんどくなってきたのが理由でもある。

「……………とりあえずもう戻ってもいい？」

「あっ、はい。どうぞ」

俺は自分の席に戻った。

「ええと、皆さん、待たしてごめんなさい。私の能力名は、ブラッディ・アフ血界吸収ソイバです。効果は、血を吸った相手の能力をコピーできます。永久的ではなくて、100ミリリットルで大体、一分ぐらいコピーできます」

アリスさんは能力名と能力の効果の説明した。

「それでは、コピーした能力を使ってみたいと思います。えい！」

アリスさんは、そう言って腕を振り下ろした。すると、

「グッ…！？」

何かが俺の無防備なボディに完全に決まり、俺はそれだけを理解して、意識が途絶えた。

「……ふあゝ…あれ？」

目が覚めると、見知らぬ場所のベッドで寝ていた。辺りを見てもなにか周りがカーテンで仕切られている。なんかこの状況に凄くデジャビュを感じるんだけど、まさかな……。

そんなことを考えてると、

シャーッ！

いきなりカーテンが開いた。その時、俺の脳裏に最悪な展開が浮かんだが、それは杞憂に終わった。そこにいたのは、

「あの…大丈夫ですか？」

アリスさんだったからだ。

「どこも痛まないから大丈夫だとは思っけど…それより、ここどこ？」

「保健室ですけど…あのう…それよりごめんなさい。私が能力の制御が出来なかったばかりにこんなことに…」

「いえ気にしないでください。俺の能力は、神の気紛れ《ゴッド・カプリス》っていつて毎回発動する能力が違います。そのうえ全部制御不可能なんでそちらに非はないですよ」

俺は、アリスさんに能力の説明をした。

「そうなんですか」

そうは言ったが彼女は項垂れるようにうつ向いてしまった。それからしばらくお互い無言な時間が続いたが、

「私、用があるのでそろそろ帰りますね」

気まずさに耐えられなくなったのか、アリスさんが言ってきた。

「あっ、うん。また明日」

俺は、そう言っただけで彼女の後ろ姿を見送った。

「さて、俺もそろそろ戻るか…」

いつまで保健室にいてもしょうがないので、教室に戻ることにしよう。

ベッドから抜け出し、保健室から出た瞬間、

ドンッ！

横から何者かのタックルを食らい、俺は吹き飛ばされてしまった。

「いたたた…ちょっといきなり出てこないでよ。カノン！」

俺を飛ばしたと思われる人物から怒った声がとんできた。

「あつ、ごめんなさい…って、カノン？」

謝った後、あれっと思ひ顔を上げるとそこにはシアがいた。

「なんでシアがここにいるの？」

「授業中に倒れて保健室に運び込まれたって聞いたから心配で見に来たのよ。その様子だともう大丈夫なようね」

「そうだったのか…。心配かけてごめん」

「別にいいわよ。それよりなんで、授業中に倒れたのよ？」

「それは、かくかくしかじかで…」

俺は、ありのままの事を話した。

「それならしょうがないわね。まあ、とりあえず一緒に帰らない？
もう放課後だし」

「いいけど…えっ、放課後っ！？」

俺は驚いた。一体何時間寝てたんだ…。寝過ぎにも程があるだろう才
レ！

「知らなかったの？ まあ今まで寝てたのならしょうがないか…あ
っ、そうそう、鞆を預かってたの忘れてたわ。はい」

シアはそう言って鞆を渡してきた。

「ありがとう。シア」

俺はシアにお礼を言った。

「じゃあ、行くわよ」

シアは歩きだし俺もその後を追う。

「そういえば、あれからミリア見なかったな……」

ふと、思ったことを口にしてしまった。あれだけ付き纏ってきて、
それが無いことに不気味さを感じたからだ。

「姉さん？　姉さんなら、確か一時間目の休み時間に生徒指導室に連行されてたわよ。多分今も説教されてるんじゃないかしら？」

「一体、なにやればそんな長時間説教されるんだよ……」

俺は呆れてしまった。

「私の担任の先生から聞いた話では、二日ぐらい前から誰かにストーカー行為をしてたことについてらしいわ。もしかしてストーカーされてたのカノン？」

「……………当たり」

認めたくないことだが。

彼女は、やっぱりですかとため息をついた。

「とりあえず、俺が話振っというて何だが、ミリアの話は止めよう」

「そうですね……」

彼女も納得した。

その後、俺らはミリアの話を忘れ談笑しながら帰り、今度買い物に行こうと約束してお互いの寮に帰っていった。

（続く）

第3話：前編

「平穩っていいことだな……」

次の日、俺は朝食を食べながらジジ臭いことをしみじみと呟いていた。

今日はいつも通りの時間に目覚めたのだが、普段より気分がいい。なぜなら、ミリアのストーカー行為がなく、そのうえ寮に帰ってみると寮長に会い、『これあげるわ』と言って食材をくれたからだ。なのでようやく食事をするのができ、空腹感からも解放された。これからは、平穩な日々の大切さを噛み締めながら生きていこう。

そんなことを考えながら、俺は学校に登校した。

教室に入ると彼（KYY）が数人の男子にイジられていたが、イジメられているわけではないので俺は気にせず自分の席に座る。

鞆から教科書を出し、机の中に入れてみると、

「みんな、席に座ってね」

担任のエンリコ先生が教室に入ってきた。今回は普通に廊下から歩いてきたようだ。

……いや、人形が“普通”に歩いてくること自体がおかしなことなんだが。もう慣れている自分の適応力に感心すると同時に、そうして感覚が麻痺していくのかと恐ろしさも感じた。

そしてみんなが言われたとおりに次々と席に座った。

「朝のHRを始める前に、みんなにお知らせがあります。今日からこのクラスにもう1人クラスメートが増えることになりました」

「それって、女ですか？ それとも女ですか？」

誰かが真っ先にそんな質問をした。

欲望丸出しだなオイ。

「女の子だよ」

その一言を聞いた瞬間、教室にいた男子の歓喜の声が上がる。

その歓喜の声が収まるのを見計らい、先生がドアの方へ体を向けた。

「では、入ってきてください」

ガラガラ、とドアを開け、コツコツ…と足音を立て、転校生と思われるおぼしき人物が、教卓の横まで歩いて来た。

覆面をつけて。

「自己紹介お願い」

先生は覆面のことは一切ふれずに言った。

「はい。その前に覆面脱いでいいですか？」

「ん？ いいよ」

先生の上承を得ると、転校生は覆面を脱ぎだした。脱ぐならなんで覆面なんかつけてきたんだろう…。

脱ぎ終わり、顔が露になる。そこにいたのは、

「初めまして。私は2年の異能科から『退級』してきました、ミリア・ウィルヘルムです」

「ギャアアアア！！」

ミリアを見た俺の悲鳴が教室に木霊した。

間違いようもなくミリアだった。今日は髪型をポニーテールにして、眼鏡をかけていたが、ミリアだった。

「カノン、静かにしてください」

先生に怒られ、周りからも不審な目で見られた。

「はい……」

俺はこれ以上不審な目で見られたくないので極めて冷静を努める。

「あつ、そうそう彼女は校長のお孫さんだから、あんまり彼女にち

よっかいかけないほうがいいよ」

先生は思い出したように付け加えた。

「えーっ!？」

クラス全員の驚きの声が上がった。

それは俺も同じだった。まさかの新事実の発覚。校長といえば、俺をこの学校に弱味に付け込んで入学させた張本人であつたので、最初の頃は恨んでいたけど、入学式の後、外敵からの危害を防ぐために部屋を鉄壁の防御力にしてくれた人でもあるので今はそこまで恨んでいない。だけど、まさかミリアのじいちゃんだとは予想もできなかった。

「とりあえず、質問がある人います？」

ミリアがそう言つと、

「趣味なんですか？」

「なんで、退級したんですか？」

「どんな能力もってるんですか？」

「付き合つてくれ!!」

という普通の質問が飛び交う。……けど最後のは、質問つてゆうよ
り告白ではないだろうか……まあ、俺的にはそれで誰かと付き合う
ことになつたら俺に対するストーリーカー行為がなくなると思うので非

常に助かるのだけど。

「趣味はですね、料理です。退級した理由は、昨日とある事情で生徒指導室で指導されてて、好きな人がこの教室にいるんですって言ったら、生徒指導のルーフ先生が、『恋する乙女は、美しいな』と言って、その人テレボーションのいる教室に編入させてくれたんです。次の能力についてですが、瞬間移動テレボーションです。最後の質問なんですけど…、いいですよ。付き合っただけでも」

ミリアは矢継ぎ早に質問に答えた。

……え？

ってか、最後のマジ…ですか…？

…や…やったー！！

……これで、あのストーカー行為からの苦悩の日々からも解放されたぜ！

俺が心の中で喜びまくっていると、

「……その代わり、条件があります」

ミリアが、ボソリと付け加えていた。

「私の好きな人を貢ぎ物としてくれるのなら、私が主でああなたが下僕とゆう立場で付き合っただけです」

うん。俺の喜びを返せ。

そんな条件の、まったく違う意味での付き合っで、相手が納得もOKもするわけが……

「マ、マジで!? やったー!! その条件呑むよ!」

……ない……だろう……。

俺の隣の奴が急に喜びだした。

……する奴いたんだ。

ってゆうか、こっちの了承を得ずに勝手にOKすんなよ!!

「それで、誰を貢ぎ物として渡せばいいんですか?」

「あなたの隣の席に座ってる、カノン・ストレイト君です」

ミリアが俺の名前を出した瞬間、そいつはガタガタ震えだした。よく見るとそいつは、昨日アリスさんが廊下に連れ出した内の1人であることを思い出す。

「す、すいません。やっぱいいです」

彼は速効諦めた。

……あのう……、なんで話したこともない人に、俺の名前が出ただけで、あんなに怯えられるんだろう……。オレ、なんか知らないうちになんかやらかしたんだろうか……?」

そんなことを考えてると、

「…カノン君、恋人として付き合って――」

「嫌です」

「……………」

「嫌です。絶対付き合いません！」

俺はミリアが話し終わる前に断りを入れる。

実は、シアからミリアが話し掛けてきたときの対処法を伝授されていたので、実行に移したのである。

シアが言うには、

『普通の会話は無視するのでいいんだけど、話し掛けられてどうしても話さないといけない時は、間髪を入れずに言いたい事を言ったあと取り合わないようにするしかないわ』

だ、そうだ。

流石に最後のは効いたのか、ミリアはしばらく押し黙っていたのだが、

「……嬉しいです。それも『いいよ。だけど恋人じゃあなくて夫婦として付き合おうよ』なんて言ってくれるなんて」

ミリアは凄く嬉しそうな顔をしてそんなことを言い出した。

俺はそれを聞いてもう最悪な気分である。

………そういえば、言語変換能力もってましたね………すっかり忘れてたよ。

………対処法、全然役立ったなかったよシア。

後でちよつと文句言いにいこう。

「………そろそろ、告白タイムをやめて静かにしてくれないかな………」

「す、すいません………はっ!？」

先生がイライラした感じで言ってきたので、謝ってから先生の方を向くと、先生は両目から血涙を流していた。

………実際にぬいぐるみから血涙が流れてる様子にはまだ適応ができなくて凄く怖かったが、それはまだ自分が普通である証なのでそのことに安堵した。

俺とミリアが静かになると、

「ミリアさんの席は、廊下側の一番後ろの席なのでそこに座ってください」

先生は、腕でミリアの席を指しました。

すると、

「異議あり!!」

急に大声でミリアが挙手しました。

「異議ってなんにですか？」

「カノン君の席の隣じゃあないことにです」

「いや、そこしか席空いてないからどうしようもないんだけど」

「なら席交換はダメですか？」

「まあ、それならいいけど…。その3人、席交換したい人いる？」

『……………』

3人とも、返事をしなかった。

ナイスだ。3人。

「誰もいないみたいなので諦めてね」

「……………はい」

ミリアは、意気消沈な面持ちで自分の席に向かう。

「それでは、次に午後からある能力実習はグラウンドでやるから時間になったらみんな集合してください…以上でHRを終わるね」

そう言って、先生が廊下に出ていくと同時に、

キンコーンカーンコーン

ちょうど授業開始のチャイムが鳴った。

そしてそれは、高校生活初めての授業のスタートが切って落とされたことでもあった。

（続く）

第3話：中編

「……これから3年間、本当にやっていけるんだろうか、オレ……」

昼休みになり、屋上の落下防止用の柵に背を預け、だらけながらモソモソと昼飯のサンドイッチを食べつつそんなことを呟く。

午前中の授業は数学・現代文・社会だったのだが、もう最悪だった。授業中にその教科の先生に問題を解いてみると当てられるたびにミアが『頑張れ!』と応援するうえに、俺が問題を解くまでそれがうるさいぐらいに続くので、こちらに非がないのにも関わらず全部の授業で理不尽にも俺だけが廊下に立たされた。

……高校生になってまでまさか廊下に立たされることになるうとは。

まさしく、屈辱の極みだ。

3時間目終了のチャイムが鳴ったと同時に、この後ミアと一緒に昼飯を食べようなどと誘ってきそうだったので、もう関わりたくないの为先手を打ち、購買部に昼飯を急いで買いに行つてすぐに屋上に駆け込み、こうして物陰に隠れて食事をすることにしたのである。

そしてさっきの一言が洩れてしまったわけだ。

晴天の青空を見上げ、それとは逆の曇りがかった陰鬱な気分で溜め息を吐く。

こんなのが毎日続いたら精神的にキツいな。……確実に精神を病むかも。

これからの事に想いを馳せて考えてると、

キンコンカンコン

昼休みの終了のチャイムが鳴った。午後の授業が始まるのがこの5分後なので、俺は考えることを止めてグラウンドに向かうことにした。

グラウンドに着くと、クラスメイトの殆どが集まっていた。その中にミリアの姿はない。

俺はホッとした。ミリアの姿を見るだけで精神的に疲れるので、できるだけ見たく……

「あつ、いたいた。もうどこ行ってたんですか？」

噂をすればなんとやらで、本人がいきなり目の前に現れた。どうやらテレポーテーションを使ったようだ。

見たくないのに現われんなよ。

俺はイライラしてきたので、顔を横に向けて見なかったことにした。

「みんなー、もう集まったかいー？」

いいタイミングで先生の声が聞こえてきたが、どこにいるのか分からなかった。

「先生どこですか？」

クラスメイトのみんなも先生がどこにいるのか分からないように、辺りをキョロキョロと見回している。

「ここだよー、ここー。校舎の屋上ー」

その声に屋上を見上げると、エンリコ先生が屋上の柵の上に立っているのが見えた。

「とおっ！」

するとエンリコ先生は格好良く屋上から飛び降り――

「「「あ」「」」

と、みんなが思わず口から漏らしてしまうほどに呆気なく、突然に、近くを飛んでいた鷹の両足に捕えられた。

「ああアああアア……」

そうして空の彼方へと消えていこうとするエンリコ先生の叫び声が小さくなっていくところで、ようやくみんなも事の重大さに気付いた。

「「「エンリコせんせえええええつ！！」」」

みんなの必死な声が上がった。

「私に任せてください」

そのとき。

ミリアが一步前へ踏み出し、黒い棒状の物を手に持って静かに言い放った。

「えーい！」

そしてそれを掛け声と共に鷹に向かって投げた。

それは綺麗な放物線上を描き、鷹に当たる手前で雷が轟くような爆発を起こし、その音に驚いて鷹はエンリコ先生を掴んでいた両足を放した。

それにより、

「うおおおおいつー！」

と、エンリコ先生は叫び声を上げながら地面に向かって落ちていき、ベチャツ。

というグロテスクな音を立てて地面に黒い液体の海を造り、そのままだ動かなくなった。

みんなしばらくそれを見て呆然としていたが、

「『エンリコせんせええええっ!?』」

事態を理解して、みんな慌ててエンリコ先生のところに向かう。

「『うわぁ……』」

近付いてみると、そこにはとても言葉では説明したくない光景と、イカスミの独特の匂いが広がっていた。

みんながそれを見て嫌な顔をする。だがミリアだけが先生のすぐ側まで近付いていき、

「今日はイカスミのスパゲッティですね」

などと言いやがった。当然のごとくみんなの反応は、

「『食えるか!』」

と、当たり前のツツコミ。普通の神経なら今はそんなこと言えるわけがないし、それにこの光景見てイカスミがトラウマにならない奴なんて普通いないから。

「えゝ、美味しいのになぁ……」

ミリアはガツカリとした表情をした。

「『……あのー……誰も僕の心配とかしてくれないのかな?』」

下の方から声がしたので見てみると、なんとか立ち上がろうとする
エンリコ先生が見えた。

「……身体動かして大丈夫なんですか？」

誰かがそう聞くと、

「大丈夫だよ。だって痛覚ないし、関節も骨もないからまったくの
無問題」

「じゃあなんでさっきまで動かなかったんですか？」

「うん？ ああ、みんなの反応を見て誰が非常識な人間か判別する
のにちょうどいいなと思ってね。あつ、たぶん気になってると思う
けど、イカスミは落下の衝撃でどつか破けたみたいで漏れただだ
けだからね。まあ、ほっとけば勝手に止まるし破けたところも勝手に
直るから気にしないで」

エンリコ先生は、聞いてないことまで矢継ぎ早に説明した。

知りたくないことの説明ご苦労様です……。

「じゃあ、いろいろ遅れたけど授業始めるね」

エンリコ先生がそう言ってようやく授業が始まった。

「では、昨日決めた班に集まってね」

エンリコ先生の言葉にみんなが移動を開始したが、俺は自分の班が

分からなかったので先生に聞きに行く。

「先生、昨日ずっと保健室いたので班が分からないんですが」

「私も分かりません」

ミリアも俺に続くように聞いた。

「そういえばそうだったね。えーと……、カノンは、アリスとエイドのいる零班で、ミリアは、バルドスブのいる十二班ね」

「異議あり！！　なんでカノン君と違う班なんですか！」

ミリアがエンリコ先生に異議を申し立てた。

「だって彼の能力、稀少能力の類だから同じ稀少能力の人達の班がいいと思ってね。カノン、異論あるかい？」

「いえ、まったくないですよ」

俺は、異論がないとエンリコ先生に答えた。

とりあえず班が分かったことだし、俺はミリアがこれ以上何か言うまえに、零班に早足で向かった。

零班に着くと、アリスさんともう一人男子生徒がいた。多分彼がエイドさんのだろう。

「あつ、こんにちは」

「こんにちは」

アリスさんが俺に気付き、挨拶をしてきたので俺も挨拶を返す。

「それと…、はじめましてエイドさん。え、えつと名前合ってますよね？」

俺は次にエイドさんに挨拶をした。

「ああ、合ってるぜ。エイド・ブレイザーだ。呼ぶときは呼び捨てでいいぜ」

「あつ、私も呼び捨てで呼んでくださいね」

「なら俺も呼び捨てで呼んでくれ」

こうして3人とも、呼び捨てで呼ぶことになった。

なんかそれまでのやりとりが恒例になっていくような気がするが。

気にしないでおこう。

「さて、みんなもう自分の班に集まったようだし今日の授業内容を説明するね」

エンリコ先生は、辺りを見回してそう言って説明を始めた。

「今からみんなにしてもらうのは、グラウンドを使つての全班対抗のリレーね。勿論能力を使ってありの。周回数は3周で、十二班は人数足りないからどっちか1人は2周走ってね。で、何か質問ある

「？」

「……ないです」

「じゃあ5分あげるから走る順番決めてね」

エンリコ先生の説明が終わり、各班で話し合いが始まった。

5分後…

第1走者がスタート地点に並び始める。その中にはミリアの姿もあった。

俺達の順番は、エイド・俺・アリスとゆう順番になっている。

オレ1番手じゃあなくて2番手選んでホントよかったと、心の中でホッとした。

「それでは……よい、ド——」

エンリコ先生がまさにスタートの合図を切ろうとした瞬間、

「あつ、みんな言い忘れてたこと言っとくね。このリレーの最下位の班には、罰ゲームがあるから」

「……ええーっ!?!」

エンリコ先生のその思い出したような一言でみんなの驚きの声が上

がる。

まあ、当然の反応でした。みんな罰ゲームがあるとは思ってなかったから順番を適当に決めてるだろうし。

「まあ、最下位にならなければいいだけだよ。よいドン！」

エンリコ先生はそんなことを言いながら、不意打ちみたいなタイミングでスタートの合図を切った。

そうしてみんな慌てて出遅れながらも走り出したが、ミリアだけ全員が走りだしてから緩慢な動作で一步踏み出すと、

「えい！」

ミリアの姿は見え失せ、ボタンタッチラインの5メートル手前の所に現れた。

汚なッ！　テレポーション使いやがった！

「「「あんなのありかよ！？」」」

みんなも俺と一緒に憤慨したが、

「当然ありだよ」

エンリコ先生がありだと認めては仕方ない。

そんなことをしているうちに、KYYがミリアからボタンを受け取り走り始めていた。

「おい。まだ、そんなところを走ってるのか。このノロマ共がっ！」

KYYは前方を走る第1走者にホントに空気を読めない発言をしちやいました。

それを聞いた第1走者達全員が後ろを振り返り、

「ふざけんなよこらあああー！」

全員がKYYに襲い掛かった。

「えっ…ち、ちょっ——グフェー！」

それを見たKYYは止めようとしたが火球や落雷などのいろんな能力が直撃して無理だったようだ。

10秒後…

そこにはボロ雑巾と化したKYYが倒れており、身体から煙が上がっている。

その近くで第1走者達の満足した顔があった。

……ホント、口は災いの元だって改めて理解する場面だったな……これ……。

「みんな立ち止まってないで走つてよ」

「……あつ、はい」「」

エンリコ先生が言うとなんか慌てて走りだした。……1人を除いて。

「バルドスブも早く立ち上がって走らないと最下位になるよ」

エンリコ先生がKYYに近付いて言うが反応がない。

「仕方ないな……起きない起きない起きない起きない……」

エンリコ先生は、KYYの胸部に立ち往復ビンタを始めた。

それは5分ぐらい続き、その頃にはもう十二班以外ゴールしていた。そしてKYYの顔は少し腫れあがっていた。

「先生、もう十二班以外ゴールしたんですけど……」

誰かが業務的に往復ビンタをし続けるエンリコ先生に進言する。

「あつ、そう。なら後はみんな教室に戻って自習。後、十二班は罰ゲームとして草むしりするように」

エンリコ先生はそう言ってまた往復ビンタを再開し、みんなを引かせた。

教室に戻れと言われたので俺も戻ろうとすると、

「あの…カノン君草むしり手伝ってくださいますよね？」

「……………」

俺はミリアの声を無視して早足で教室に戻った。

こうして、今日の午後の授業はそこまで精神的疲労が蓄まることなく終わったのだった。

（続く）

第3話：後編

「じゃあ、これで今日の授業は終わりね」

「「「ありがとうございます」」」

本日の授業が終わり、みんなが授業とゆう束縛から解放されて気が緩みかけた頃、

「それでは、最後にみんな教室の掃除をやってね」

エンリコ先生がそう言って、みんなで掃除することになった。

みんなが机を後ろに詰めだしたので、俺も机を後ろに詰める。

楽そうな筈でもやるか…

そう考えて掃除箱に筈を取りに行こうとすると、

「あもう、カノンちょっといいですか？」

アリスに呼び止められた。昨日の、恐怖を感じたあの笑顔で。

それを見た俺の本能が断ることの危険度がレッドゾーンだと訴えてきたので、

「…………いいよ」

って言うしかなかった。

「よかった……。あのう…放課後時間ありますか？ 大切な話があるので屋上に来てほしいですけど……ダメですか？」

アリスは、最後の方には何故か潤んだ瞳で断ったら完全に泣き出しそうな表情で言ってきた。

そんな表情で言われては、俺にはとても断ることは出来ない。

「いや、大丈夫だよ」

そう言うしかなかった。

……あれ？ なんか前にもなんかこれに近いシュチュエーションがあったような……

ふとそう思ったので思い出そうとしたが、

「じゃあ、必ず来てくださいね」

アリスに話し掛けられて現実に戻されたのでできなかった。

そしてアリスは掃除をしに向こうへ行った。

大切な話って何だろうと思いつながらも、まあ行けばわかるからいいかと結論づけて、掃除をするために再び箒を取りに行った。

掃除は5分ぐらいで終わり、放課後になった。みんなのやる気を伺わせるような時間だった。

「さーで、行くか…」

俺は、約束を果たすために屋上に向かおうと教室を出ようとしたが、

「カノン君、一緒に帰りましょう」

……ミリアに呼び止められてしまった。

「…用事があるから無理」

俺はそう言ってさっさと屋上に行こうとしたが、ミリアに上着の袖を掴まれた。

「……手を放してくれないかな？」

「私もその用事に付き合います」

「いや、いいよ。個人的な用事だから1人で行きたいんだ」

「でも……」

後もう一步。

押したら引き下がりそうなので俺は咄嗟に、

「そ、そういえばミリアが草抜きしてる時に妹さんがきて、放課後に大切な話があるから来てくれって言ってたよ」

と、言ってしまった。そして後から後悔が押し寄せてきた。咄嗟のことはとは言え、嘘を言ってしまったんだから。

そんな後悔に浸っていると、

「そうなんですか？ ちょっと話聞きに行ってくるので待っていてくださいね」

ミリアはそう言ってあっさりと隣の教室に行ってしまった。

なんか、妹には素直で従順そうだな……。

……とりあえず、シアに後で文句言われたらなんとかして許してもらおう……。

俺はそう思い、屋上に全速力で向かった。

屋上に着くと、既にアリスがそこにいた。

「ごめん、待った？」

「いえ、私もさっき来たばかりですから。……では、さっそくですけど本題に入らせてもらいますね」

そう言つて、アリスは深呼吸をしてから、真剣な表情になる。

「真面目に答えてくださいね。……あの、今、付き合つてる人はいますか？」

そんなことを聞かれた。この時、俺の脳内ではもしかしてこの後、愛の告白をされるのではとゆう展開が浮かんだが、まさかな……と自分でも自惚れが過ぎるなと思ひ忘れることにした。

「……………いないよ」

まあ、言つて悲しくなりそうだったが。

「次に、ミリアさんとはどうゆう関係？」

「ストーカーと被害者の関係。あつ、分かつてると思うけど、オレが被害者だからね」

これに関しては、もうなにも考えずに言葉がでた。

「そうなんですか……好都合……」

「えっ？　なにが好都合？」

「あつ……気にしないでください」

いや……、気にするなつて言われたら、余計に気になるんだけど……。
というか、一瞬目付きが蛇のようにギラついたような気がしたのは
気のせいだろうか。

そう思ったが、まあわざわざ蒸し返すようなことでもないとも思い、追究しなかった。

「それで最後に聞いてほしいことがあるんです」

アリスが改まって言葉を紡ぐ。何故か若干顔が赤くなっているような気がするうえに、こっちの目の前まで歩いてきた。

「実はですね――」

「えっ………？」

胸に走る衝撃の後、一瞬の浮遊感。

なんの前触れもなく、なぜか俺は後方に倒れてしまったのだ。

そのうえ、

「アタシのパシリと餌になれ！！」

アリスは倒れた俺の上に馬乗りになってそんなことを言ってきた。

それに対して俺は、

「……えっ………ええと…唐突すぎて話の流れがわからないんだけど」

って言うしかなかった。

パシリはまだ意味がわかるからまだいいでしょう。だが……餌つてなに？ 俺、殺された後食べられるのか？ まあ、それよりも気になるのが、なんで今、俺は、馬乗りで、乗っかられていることなんだがな……。コレ、誰かに見られたら不味すぎるよな？

いや、それよりも、なぜか今の状況を冷静に分析している自分が少し不味いような気がする。

冷静に慣れるようになったの、確実にアイツのせいだろうな…。

「アタシ、自分の気に入ったものは手元に置いときたいんだ。だからパシリにしたらある程度、手元に置けるから餌の血液も摂取しやすくなるって話だよ。あつ、気に入ったところは、能力の面白さと血液がなんか気に入ったからかな」

アリスは、矢継ぎ早に説明した。

「で、返事は？ YESかはい、どっちだ！」

「どっちも同じ意味じゃねえか！？ NOがなんでないんだよ！？」

「断るわけがないから必要だろ？」

アリスは、さも当たり前のように言ってきた。

なんかこれもつい最近、近い話があったような……。

そんなことを思い出していると、

「なら、更に条件をつけてやるよ」

アリスは、そんなことを言ってきた。

「今もミリアのストーカー行為に困ってるんだよな？ 絶対とは言わないが助けてやるよ。後、今日の午前中みたいなのがあつたら授業で写したノート貸してやるから、それでどうだ。ん？」

「……ちよつと考えさせてくれ」

俺は、アリスからの提案に少し時間をもらって思案を始める。

うーん……。ちよつとこの提案内容はいいな。魅力的すぎる。ミリアのストーカー行為をある程度抑えてくれるかもしれないし、その次のノート借りられるのが凄くうれしい。完全にあの授業のあの嫌がらせを止めるのは、無理だろうから……。このままでは、そのうちある中間テストの点数が絶望的な赤一色で彩られるだろうし。それだったら最初の条件は、対価だと思えばいいかも。

「その条件で呑むよ」

俺はその条件で呑んだ。

そう言つと、アリスは俺の上から退いて、

「ならまずは、約束の授業のノートだな」

アリスはそう言つて鞆から三冊のノートを取り出して、渡してきた。

「ありがとう」

俺は立ち上がって受け取り、礼を言った。

「それじゃあ、そっちの約束も守ってもらうな」

アリスは、そう言つと俺の背後に人間の限界を越えているのではと思わせる速さで周りこみ、抱きついてきた。

「ギニャーッ!？」

俺の悲鳴があがった。

背中に何か柔らかい感触がするんだけど、ナニコレナニコレ!？

そんなパニック状態になっていると、

「では…、いただきぜ」

アリスは、また昨日と同じ場所に口を近付けて血を吸い始めた。

それは10秒ぐらいで終わり、アリスは口を離す。

「ご馳走様。さあゝて、もう用事終わつたし帰るぞ」

「えっ？　ちよっ、ちよつとまってまだ止血が――」

そう言つてアリスは俺の腕を掴んで連れていく。

俺の声は空しく響き、屋上を後にした。

下駄箱に着き2人で上履きと靴を履き替えていると、

「そういえば、この口調に関してなにも聞いてこなかったな。なん
でだ？」

アリスは、そんなことを聞いてきた。

「うーん…なんていうかその口調のほうが今のアリスのイメージに
俺的には完全に合ってるからいいなと思ったから。聞かなくていい
やってのが理由」

俺は素直に感じたことを言った。

「そ、そうか」

そう言っアリスは俯き、頭の周りに湯気があがりだした。

それを見た俺は、

「あつ、女の人に男言葉が似合うなんて気分が悪いよな……すまな
い」

それが怒りであがった湯気だと思い謝った。

「……………」

「と、とりあえずまた明日」

俺はその無言に耐えられなくなり、そう言っ逃げるようにその場
を去った。

カノンが去った後も、しばらくアタシ、アリス・ジュエラーは俯いていた。

なぜさっき俯いてしまったかとゆうと、

……初めてだな。この喋り方をアタシに合ってるなんて言ってくれたヤツなんて…

今まで逢ってきたヤツらは、こんな喋り方をしていると、ムカつくんだよつと喧嘩を売ってきたヤツばかりだったのに。

人にこの口調を褒めてもらってこんなに嬉しくなるとは思いもしなかったぜ。

嬉しさのあまり顔がニヤけてしまうと思いかノンに見られるまえに慌てて顔を隠したわけだ。

今ようやく顔が元に戻ったのだが、

「カノンに勘違いにされたまま帰られちゃった…どうしたらいいんだ」

アタシは、後悔していた。

「とりあえず、ここにいてもらちがあかないし明日までになんとか勘違いだったという方法を考えるしかないな…」

そうしてアタシは、考えながら帰った。

(続く)

第4話：朝

次の朝になった。

「ふあゝ……ううううさあむう。うゝ……それ以前に寝たりない……」

俺は欠伸を噛み締めながらそんなことを呟いた。

「やつぱ駅の待合室なんかで寝るもんじゃあないな…寒いうえに身体が痛い」

と、今言ったように駅の待合室で寝ていたからだ。

なぜこんなところで寝ることになったのか、その理由を思い出してみよう。

昨日、寮に帰ったあと二階の一番奥にある自分の部屋に向かおうと一階の階段を昇っている最中のこと。

「んっ？」

突然、俺の脳裏にこの寮の間取りと各部屋の人の位置や名前が浮かび、そしてそこには俺の部屋の前にミリアの位置と名前があった。

……なんだ？　なにが起きたんだ今の……。もしかして、なにかの気配察知能力でも会得したのかオレ？　……いや、そんなわけないか。俺にそんな能力を会得できるわけないし。

まあ、とりあえず階段上がって確認してみるか。

俺は楽観的にそう思いながらも、一応階段を上がって壁際からちょっと覗いてみた。

すると、

「マジでいるし……」

さっきの脳裏に浮かんだ位置にミリアが正座で座っていた。

どうやら会得したようだが、けどどうして探知したんだ？　さっきのから察するに自動式か？

まあ……それよりも今はどうやって部屋に帰るかなのだが……。うーむ。あれでは部屋に帰れないな。……しょうがない、何処かで野宿か宿で一泊でもするか。

俺はそう考え街に行くことにした。

街に着くと、まず俺は明日学校に着ていく服を買いに服屋に行き、次に、そういえば今日リレーをやったから汗かいたし風呂に入りたいなあと思っていると、丁度前方に偶然にも「幸福の後の残り物の湯」とゆう温泉を発見した。外に料金表があり結構低料金だったの

で入ってみることにした。それが決定的な間違いだと知らずに……。温泉には誰もいなく貸し切り状態で堪能することができ、満喫できた。

そうして温泉からあがり脱衣場に服を着に戻ってみると、

「……………」

俺は、言葉を失った。

脱衣籠に入れておいたさっきまで着ていた服が無くなっているのだ。買った服と鞆と財布はあるのに…。

普通逆じゃね？

しばらく呆然としながらそんなことを思っていたが、いつまでも呆然としていてもしょうがないと思い始め、盗難にあったことを管理人に言いに行こうと買った服に着替えた。

着替え終わって脱衣場をでて、作業をしている従業員のおばちゃんを見つけたので事情を説明すると、

「ああ、よくあることですよ。不幸の温泉ですから」
などと言ってきた。

「そうなんですか…ん？ 不幸の温泉…だと？」

「ええ、はい。幸福の後の残り物の湯だから、残ってるのは不幸に決まってるじゃあないですか」

おばちゃんがそう親切に説明してくれた。

言われてみれば、確かにそうだな。…なんでこんなことに気付かなかったんだろう過去のおレよ…。自分の手で余計に不幸になるとは…最悪だ。

過去の過ちに気付いて気分が最悪になっていると、

「とりあえず、盗難届け出す前に、お会計をレジで払ってもらいますので付いてきてください」

おばちゃんは、そう言って歩きだしたので俺はその後についていった。

レジに付くと、

「それでは、代金が500フォンなんで、今の財布に入ってる全額ですね」

おばちゃんがそう言ってきたが、

「…えっ…？ 代金が今の財布の全額の500フォン？ まさかそんな…」

まさかと思いつながら財布の中身を確認してみると、

「あっ…、マジで500フォンしか入ってない…」

ホントに減ってた…。それも札入れには、札の代わりに白紙の束が枚数分入っていて、これで重さを見た目を誤魔化していたようだ。

「とりあえず、はい」

俺は代金を払った。

「はい、確かに。次に、盗難届けを書いてください」

おばちゃんは、そう言って盗難届けの紙を渡してきたので書いた。

「全部書いてますね。犯人が捕まり次第、連絡しますが、何かご不明な点がありますか？」

おばちゃんが聞いてきたので、

「ここ盗難が多発してるにしては防犯対策が全くされてなくないですか？」

俺は思ったことを聞いてみた。

「そのことですか。それはですね…対策しても意味がなかったからです」

おばちゃんが説明を始めた。

「脱衣場に黒服の監視者を置いていたのですが、被害がおさまらなかつたのです。能力の可能性も考えて無力化の結果も設置しても被害は相変わらずだったのもう諦めたんです。他に何か質問はありますか？」

「あります。……なんで、財布に残ってる額知ってるんですか？」

さつきから気になっているもう一つのことを聞いてみた。

「ああ、それですか。実は、今までここに入浴した方全員が、財布のお金と服を盗られていて、何故か財布のお金が500フォンしか残ってないんです。例えば499フォンでも」

おばちゃんは理由を説明してくれた。

「それって、つまり無一文でも来ても500フォン手に入ってお風呂呂に入れるってこと？」

「そうゆうことですが、499フォン以下で来た人は、何故かここから出た瞬間に、落雷や槍の雨など数々の不幸な目にあってますね」不幸ってどころの問題ではないと思うのは気のせいだろうか。それに何があつたら街中で、槍の雨が降るんだろう…。

やはり、なにかの能力だろうか？

いろいろ思ったが、気にしていたらキリがないと思い、俺はこれ以上聞くのを止め、この温泉から出ていった。

もう二度と来ることもないだろう。

その後は、金がないので何処か寝る所がないかと捜していると駅の待合室を見付けたのでここで寝ることにしたわけだ。

以上で思い出しタイムしゅくりょく。俺がホームレスの気持ちに気付かされることになったのは、ミリアが部屋の前にいたせいと、あ

の温泉に入ったせいだ。

「よし。理由が確認できたし、学校に行くか」

俺は学校に向かった。

学校に着き、靴箱で靴を履き替えていると、

ポンポン

と、背中を叩かれたので振り替える。

「フグウオツ！」

いきなり右頬に強烈なビンタが炸裂して、無防備だったため体勢を崩してしまい床に倒れた。

「痛っ」。誰……って、シア！？」

ビンタの痛みに耐えながら起き上がりつつ顔を上げると、そこには怒った顔のシアが立っていた。

「今のビンタで昨日私に迷惑かけた事は、チャラね」

そう言って、シアはオレに背を向けて歩きだした。

俺は、茫然としながら歩いていくシアを見ていたが、ふと我に返り慌ててシアの後を追いかけた。

シアに追い付くと、

「本当に昨日はゴメン」

マジ心を込めて謝った。

するとシアは振り返り、

「もう許してるんだから謝らないでよ」

許してると言っただけでまだ顔が怒ったままだった。

さて、どうしたら本当に許してもらえんだろうと考えると、

「そっちの気がすまないなら、何か私のお願いをきくってことでどう？」

と、シアが提案してきた。

うーん。まあ、それで機嫌が治るなら聞いてもいいんだけど、でも問題はなにをお願いされるかなんだよね…。まあ、シアのことだから変なお願いではないはずだし、機嫌治してほしいから聞くか。

「それでいいよ。で、お願いってなに？」

「そうねえ。姉さんの部屋に『愛してるぜミリアー!』と叫びながら入って行って姉さんを抱き締めてきて」

「自爆テロどころじゃねえぞ!？」

自爆どころか自縛。

完全な自殺行為である。

だけど、シアの表情から察するに冗談ではなくマジで言ったようなので、やらないとシアの機嫌が治らない。……どうしたらいいんだ。誰か正解を教えてくれええええ！！

そんなある意味、究極の選択を選ぶために頭をフルに使って苦悩しながら考えてると、

「……………ぷっ、あはははは！ さっきのは冗談よ。私がそんなことをお願いするわけじゃないじゃない」

シアは急に笑いだして、冗談だと言った。

……頼むからミリアを使った冗談は止めてくれ。マジで信じてたんだから。……けどまあ…、ホントよかった。さっきの選択を選ばなくてすんで…。

俺が安堵していると、

「それじゃあ、ホントのお願い言っわね」

シアはそう言って少し間をあけて、

「今日、お昼に一緒にお弁当食べてくれない？」

シアはそんなことをお願いしてきた。

「えっ？　お願いってそれ？」

そんなことでいいのだろうか？

「ええ。おかずの試食してほしいのよ。ダメ？」

「いや、全然ダメじゃないよ。喜んで試食するよ」

俺はそう言った。

願ってもないことだ。学校が終わるまでは、飯に有り付けないと思っていたのだから非常に助かる。

「じゃあ、昼休みに体育館裏で待ち合わせね」

そう言っで、シアは上機嫌にどこかへ行ってしまった。

「……なんで、あんなお願い聞いただけで上機嫌になったんだ？」

俺はシアが去っていった方向を見てそう思いながらも、しばらくしたら教室に向かった。

（続く）

第4話：ホームルーム

教室につくと、また彼（KYY）が今度は女子にイジられていたが前回と同じくイジメられてるわけではないので、また無視して自分の席に座った。

しばらくすると、エンリコ先生が昨日みたいに歩いて教室に入ってきた。

「みんな、おはよう」

「「「おはようございます」」」

先生が挨拶をしてきたのでみんな挨拶を返した。

「連絡事項を言う前に全員でちょっとジャンケンをやってください」

急にエンリコ先生はそんなことを言ってきたが、

「えー、メンドくさい」

「なんでジャンケンなんかしないといけないんですか？」

などと、みんなからの不評の声が上がった。

しばらくエンリコ先生は黙って聞いていたが、

「みんな、黙ってジャンケンやらないと通知表の評価オール1にしちゃうよ?」

職権濫用の脅しを言ってきた。

「おーし、みんなジャンケンやるぞ!」

「「「おー!!」「」」

そんな脅しを聞いて、みんな急いで気持ちを切り替えたようだ。

「全員、手を上に挙げて見えるようにしてね。あつ、後出ししたら問答無用で負けだからね」

そうしてエンリコ先生が合図を掛けた。

「じゃあ、始めるよ」

「さいしよはグー…、じゃんけんポン!」

そして全員手を挙げたのだが……、

「えっ……オレの一人負け!？」

俺はパーを出したのだが、俺以外全員はチョキを出していた。

……おいおい、一発で負けかよ!?　ってか、おかしいだろ!　なんでオレ以外の全員の出した手が同じなんだよ!?　はっ…、まさか昨日の温泉の効果か?　昨日あれだけオレを不幸にしたんだから

もう効果がなくなつたのだと思つてたのにまだ続いてるのかよ！

そんな考えが頭に浮かんだその時、

「うゝん…負けたのカノンの一人だけか…まあ、いいか」

エンリコ先生の気になる一言で俺は現実に戻された。

「…このジャンケンに負けたらなにがあるんですか？」

俺は嫌な予感しかしないものの、気になるので聞いてみた。

「それに関しては、今から説明するよ。みんなも静かに聞いてね」

そう言つて、エンリコ先生は説明を始めた。

「実は、今日あるはずの、数学・英語・現代文・社会の担当の先生方全員がこのクラスの授業をボイコットしちゃつたので、6時間全部を能力実習に使うことになりました」

「…えっ…、ええーっ!?」「」

エンリコ先生の話を聞いてクラスいた全員の驚きの声があがつた。

…おいおい、マジかよ…。職務怠慢にもほどがあるだろ……。つてかあの授業が6時間もあるのかよ。けどまあ、前回みたいな感じだと思つから楽なはず——と見せ掛けて、さっきからどんどん嫌な感じが濃くなっている気がするからほぼ確実にキツいんだろうなあ。はあ…ハズれてくれないかなあ…。

俺はこの先ほぼ確実に起きると思われる不幸な出来事がハズれることを願っていたのだが……。

「で、それで特別ルールの鬼ごっこを1時間目から6時間目の終わる5分前までやるうと思ってね。あつ、さっきのジャンケンは、逃げる役を決めるための、カノンが逃げる役ね」

エンリコ先生は言った。

よーし！！

特別ルールと時間が気になったが、鬼ごっこなら捕まえたり逃げたりするだけだから、そこまで不幸な目にあわないだろうと、俺は心の中で喜んでると、

「特別ルールの説明をするね。よく聞いててね」

エンリコ先生がルールの説明を始めた。

「1 鬼ごっここの移動できる範囲は学校の敷地の中のみ」

「2 ゲーム終了は、逃げている人が捕まるか、もしくは逃げている人が時間まで逃げ切れたら終了」

「3 休憩時間は鬼は逃げている人に手を出してはいけない」

「以上で説明終わりだけど、多分質問ないと思うけどなにかある？」

エンリコ先生が聞いてきたが、

「……………」

みんな黙ってしまっていた。

…コレって、いくら特別ルールでも、もう鬼ごっこじゃあなくないですか？

と、俺は言いたかったがどうせ言っても、なんか無駄な気がするうえに今まで聞いていて後悔しかしてきていないので止めておいた。みんなも俺と同じ考え…

「はい！ 先生言いたいことがあります」

の……は……ず。

奴（KYY）が、又々場の空気を読まずに手を挙げていた。

…そういえば、いたな……コイツが…。

…今考えたら、毎回こいつのせいで知りたくなかったことを知らされてるんだよなあ……そろそろ、喋れない体にしたほうがいい気がしてきたな…。誰かやってくれないかな…

心の中でそんな他人任せなことを思ってしまった。

「ケーワ…、ゴホゴホ…：なにかなバルドスブ君？」

エンリコ先生は、言い直して言った。

…先生 今、明らかにケーワイかもしくはケーワイワイって言い掛

けたな…。先生も空気読めない奴と思ってたんだな…。

「はい。なんで数学・英語・現代文・社会の担当の先生方全員が授業を拒否したんですか？」

奴（KY Y）が質問をするタイミングを完全に外している質問をした。

「ああ…それが。先生も詳しくは知らないけど、昨日の午前中の全授業を妨害した男子生徒いたらしくてそれでノイローゼになったらしいよ」

先生は、そう言った後、皆が横目でチラリと俺を見てきた。

……あの…皆の眼は節穴なのかな？あの時を共有したなら授業妨害してたの誰か判ってるよね…？

俺は、皆の痛い視線に晒されるのを耐えながら釈然としない気持ちになった。

「質問は以上かな？ないならこれでホームルームは終わりね。5分後に1時間目の開始のチャイムがなったらそれが開始の合図だからね。あつ、捕まえた人、一人だけカノンに一つだけ命令できるってご褒美があるから頑張ってね」

そう言って先生は教室からでていった。

「ウフフフフ………」

教室の廊下側の一番後ろの席から突如、笑い声が聞こえてきた。

俺は、その時理解した。今からホントに命懸けの鬼ごっこをすることを…。

俺、明日を迎えられるんだろうか…

（続く）

第4話：午前中

キンコンカーンコン……

鬼ごっこ開始の合図である1時間目のチャイムが鳴り終わったのと同時に、俺は教室から飛び出して全力で走りだした。

俺が飛び出した5秒後に、教室から何かの破裂する音と、地響きのような何かが迫ってくる音が聞こえてきた。

気になり後ろを振り向いてみると、

「…えっ!？」

それは、俺の恐怖を煽るような光景だった。

走ってきたものは、

「ウフフフフフフ」

「バウワウ」

と、微笑を浮かべるミリアと、それを乗せた彼女のペットのポチだった。

なんか開始早々からスゴいものがきたな、おい！

俺はとりあえず逃げるために全速力で階段まで走ったが、

「ウフフフフ……」

……当たり前だが向こうのほうが機動力が高いので、背後から聞こえてくるミリアの声がどんどん近づいてきてるのが分かる。このままでは直ぐに捕まってしまうと感じて、

「ゴッドカプリス!!」

俺は、一か八かの賭けにでた。

能力を使った瞬間、突然視界が霞みだして、

「えっ……!?!」

ミリアのその声を最後に、思考が一瞬途切れる。

気が付いたら、何故か自分の教室に居た。そして……。

「……………」

俺は、何故かクラスの皆が集まっている中のだ真ん中に立っていた。

……おいおい、これなんてイジメかな？

俺はもうこの後起こるであろう地獄絵図じんぢは避けれないと、もう諦めて目を瞑って受け入れようとした時、

スっ……ピっ……スっ……

と、周りから寝息のような音が聞こえてきた。

「ん？」

俺は恐る恐ると目を開けて周りを確認してみると、皆立っただけで寝ていることに気付いた。

「……え、ええつと、何なんだこの状況は……」

不気味に感じながらも、いつまでもここに居て皆が起きだしたらマジ展開になるので、今のうちに逃げることにしよう。

そう考えたオレは、足音をたてずにそーっと、教室から立ち去ろうとする。

「ん……、ふあゝゝ」

後ろから、誰かが欠伸を噛む声が聞こえてきた。

俺は声がしたほうを振り向くと、奴（KYY）が眠気眼でぼーっとしているのが見えた。

その瞬間。

「……………」

奴の背後に回り込み、首に右腕を廻し左腕と十字に組んで、首を絞めあげて落すことにした。

ヤツはしばらく暴れていたが、しばらくするとピクリとも動かなくなつた。

「ふう〜……、これでよしと……」

俺は安堵して地面にへたり込んだ。

「いや〜、無駄のない見事な落としたね」

教卓のほうから聞き覚えのある声がしてきた。

ぎくりとして声がした方を向いてみると、そこに居たのはエンリコ先生だった。

「だけど、まだまだ落とし方が甘いよ。今から見本を見せてあげるから、見ててね」

そう言つてエンリコ先生は、奴（KYY）に近づき左手で触れると、いきなり先生の周りに煙が立ち上ぼり、煙が奴と先生を包み込んでしまった。

5秒ぐらい経つと、煙が晴れてきて、奴と先生が現われたが、

「……………」

俺は言葉を失つた。その原因は……、

「こつ首を片手で絞めて……」

と、奴の首を絞めながら解説している、左腕だけが2メートルも肥

大化したエンリコ先生だった。

「落とした後に、こういうふう右手で、両手足の間接を外すとか砕くとかして窓から投げ捨てるとかぐらいして、ある程度再起不能ぐらいしないと」

次は右腕が一瞬のうちに肥大化して、奴の両手足の間接を十秒ぐらいで外し、ホントに外に投げ捨てた。

……聖職者とは思えない行動だと思うのは俺の気のせいだろうか……
……ってか、凄いキモい状態過ぎるんですけど先生……。

まあ、奴に少しだけ同情を感じながらも、

「あのう、それよりも聞きたいことがあるんですけどいいですか？」
気になることがあった。

「いいけど、なんだい？」

先生は肥大化した両腕を収縮し終えると応えた。

「何で皆、寝てるんですか？」

「スタートと同時に、ミリア君が飲物サイズの缶みたいのを教室の中央に投げたら、それが破裂してガスが溢れだして、どうやら催眠ガスだったらしくて吸い込んだら皆寝ちゃった」

先生が俺の疑問に答えてくれた。

……ホントなんていうか、毎度のことがらなんでもありだな……ミリアのやつ……ってか、今まで不思議だったのだが、爆弾やら催眠ガスとかどうやって調達してるんだ？ まさか、自作……？

「自作じゃないよ。校長が護身用につて持たせてるんだつて。あつ、何で考えてることが分かったんだつて思ってるでしょう？ 先生実は、たまに人が考えてることがわかるんだよ」

「……………」

先生は聞いてもないのに説明してくれた。ありがた迷惑つてこういうのを言っただろうか。

まあ、いつまでもここにいてもしょうがないので俺はなににも言わず教室を後にした。

「さて、これからどうしようかな……………」

教室を出て、一旦どこかに隠れるかと考えた俺は、さっき休み時間の間に必死で頭に叩き込んだ学園のマップを思い出して、校舎から少し離れた場所にある図書館が思い浮かび、ミリアに見つからないうちに急いで向かった。

「やっと、到着したか」

図書館はマップで見るよりも遠く………というかこの学園そのものが広すぎるせいで思ったよりも時間が掛かってしまったが、なんとか

ミリアに遭遇することなく図書館に辿り着いた。

「凄いなこれ……」

図書館に入つての俺の第一声はそれだった。

目の前には、視界を完全に埋めつくほどの本が山のように並んでいた。

……ここならそう簡単に見つからないな。

そう思つて奥に進んでいくと、

「おや？ いらつしゃい」

と、後ろから声がしたので振り向いた。

「見たところ学生のようにだけど、今は授業中なんだからサボるのは感心しないな……」

カウンターの所にお爺さんが座っていた。

「ふむ……？ 見たところなにか訳がありそうな感じだね。訳は聞かないであげるから、ゆっくりしていきな」

お爺さんはそう言つて手に持っている本を読み出した。

まあ、とりあえず居てもいいみたいなので居させてもらつことにした。

図書館は、思っていたよりも蔵書量が多く、なんと地下にも蔵書してあるのだそうだ。行ってみたかったが、地下室なんかにいるともしもの時に逃げるのができないので行けなかった。

適当に本を読みながら、誰かこないか警戒していたが、来てもお爺さんが、誰も来てないよ、と答えてくれてるので、何事もなく時間が過ぎていき、なんと三時間目の終了時間の5分前まで何事もなく過ごせた。

まあ、それはそうと、

グウ

「腹減ったな……」

俺のお腹が空腹だと訴えてきた。

「そういえば、シアにおかずの試食を頼まれてたんだよね……早く食べたいな……」

そんなことを呟いていると、

「あ、あ、テストス」

天井に設置されている放送用のスピーカーから声が聞こえてきた。

「校内放送です。現在一年異能科のカノン・ストレイト君が学園内を逃亡しています。捕まえて私、ミリア・ウィルヘルのもとにつれ

てきてくれた人には、学食一年分の食券を進呈します。どうか皆さま奮ってご参加くださいね」

「それ反則だろ！」

おもわず、口に出してツツコミをしてしまった。

そして、

「反則じゃないよ」

まるで聞いてたかのような見事なタイミングで、これまた知ってる人……いや、ぬいぐるみだな……うん…声が、スピーカーからかえしてきやがった。

「以上で、校内放送を終了します」

校内放送は終了した。

さて、これからどうしたものか。
ミリアの校内放送のせいで1クラスから下手したら全校生徒相手に逃げ切らないといけなくなかった。

おそらく、ルール上、休み時間逃げている人を狙ってはいけないのが、クラスメイト以外の捕まえる人にも…

「適用されるよ」

足元から、そんな俺の考えをあきらかに読んだようなタイミングで声が返ってきた。

急いで足元を見ると、

「やあ、無事逃げきれてるみたいだね。」

エンリコ先生がいた。

それに続くように、

キンコーンカーンコーン……

「よっしゃー！午前は逃げ切れたぜ！」

三時間目の終了のチャイムがなり俺の歓喜の声が図書館にこだました。

そして、

クイクイ

と、スポンを引っ張られた。何だと思いみると、

「えっ、子供？」

おそらく5〜6歳と思われる子供が俺のズボンを引っ張っていた。

「はい、捕まったのでカノンの敗けで終了〜」

「!？」

エンリコ先生の突然の終了宣言に俺は驚いて声がでなかった。

キンコーンカーンコーン……

「実はさ、さっきのチャイム、ミリア君が仕掛けたブラフのチャイムだったんだ。で、今鳴ったのが本当のチャイム」

「な、なんで教えてくれなかったんですか！」

「言おうとしたときに捕まっただもん。もしかして無効だとかでも言つつもりかい？」

「まあ、潔く捕まったのは認めますけど、それよりもこの子供誰？なんで学園にこんな子供がいるの。ってか色んな事が起きてタイミング逃してたけど、先生さっきまで放送室にいましたよね？なんでここにいますか！」

俺は、矢継ぎ早に言った。

「ああ、あの放送はミリア君が君をあぶり出すのに協力してっ言うから、さっきの録音してたの流しただけだよ。図書館にいた理由は、ちょっと読みたい本があってね。それでその子供に関しては知らないな、迷子じゃな……」

「いたぞ！」

エンリコ先生が説明していると唐突に近くで声がした。

声がしたほうを見ると研究者とおぼしき身なりの男女がこちらに歩いてきていた。

その2人に気づいた子供は俺のズボンから手を離し駆け寄っていき2人のところまでたどり着くと2人に連れられてどっかに行ってしまった。

「……………えつと、あの子供とあの男女なに？なにとも言わずどっか行っちゃったんだけど…。」

「なんか、あれ感じ悪いね」

エンリコ先生も、さすがにあれには気分を悪くしたようで、ちょっと不機嫌だった。

「まあ、カノンのにはとてもよかったじゃないかな。罰の命令聞かなくてすむんだし」

「あつ！　そういえばそうだった」

いろんなことが起きてすっかり忘れてたわ。

「まあ、とりあえずここにいてもしょうがないし一緒に放送室いこうか」

「えつ、なんで？」

「なんでって、まだ君が捕まったって皆知らないじゃん。それさつさと報告しとかないと名前は言わなくても判ると思うけど、1人まづいことしかすことになるかもよ？」

「あゝ、ですね…」

先生の言葉に、俺は納得した。

そうして、先生と俺は放送実に向かった。

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485h/>

カノンの不幸な日々

2011年11月15日16時19分発行